
虹色の明日へ

Yu-Zo-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色の明日へ

【Nコード】

N5078A

【作者名】

Y u - Z o -

【あらすじ】

金常時隼人・15歳は霊能力を持った高校一年生。心優しい彼は、しかしその見た目不良な容姿と桁外れに強い腕っ節から、周りから恐れられる存在だった。転校をきっかけに、彼は人生を一からやり直すことを決意するのだが、転校先でもトラブルを起こしてしまう。そんな時、彼は一人の美少女に一目ぼれをする。そして、その美少女は、なんと彼に弟子入りを哀願するいじめられっこ兼クラスメイトの妹だった。そして彼は、何とか彼女の恋人になれる日を夢見るのだが、シャイな性格が災いし恋は発展しない。しかし、美少女の

背負う過去と、隼人の霊能力が、やがて二人の距離を近づけていく。
果たして、彼は恋を成就することが出来るのだろうか。

第1話：金常時春香

「いや、もういい加減俺で金儲けするのはやめろよ」

「失礼ね！ 誰があんたで金儲けしてるってのよ！」

……いや。あんただ。あんた……。

「なに？ なんか文句でもあんの？」

「いや……」

「そう。じゃあ、今週の日曜日だからよろしくね。あ、言っとくけどすっぱかしたらぶっ殺すからね」

語尾にハートマークのつきそうな穏やかな笑顔とは裏腹の春姉の言葉に、俺は背筋に冷たいものを感じながら、部屋を出ていく春姉の後ろ姿を見送った。

その笑顔だけ取れば可愛くて清楚な女の子であり、放たれた捨てぜりふも可愛いものだとか微笑をもって受け流せそうなものだが、うちの姉の場合はそうはいかない。

きんじょうじはるか
金常時春香。18歳。全国高等学校空手道選手権大会三年連続

優勝。世界空手道選手権大会3位入賞という恐ろしい肩書きを持つ二つ年上の俺の姉だ。清廉可憐、純情無垢な天使のような女の子としてはまさに理想的な容姿をした姉だが、俺は知っている。

その小さくてかわいらしい手が、コンクリートブロック二枚を軽々と粉碎してしまう凶器だということを。その誰もが見とれてしまふ柔らかなそうで文句のつけようのない綺麗な脚が、木製バット3本をまとめてへし折ってしまう凶器だということを。

姉の言葉がただの脅し文句ではないということを……俺はよく知っている。

俺は大きく息を吐いて、部屋の端っこに置かれたパイプベッドの上に寝っ転がった。

春姉の頼みとは、俺のある特殊能力をえさにして金儲けに利用することだ。俺のある特殊能力……。その詳細は、まだ伏せさ

せてほしい。ってか、話したくねえ！

ちくしょう！　今の俺は、春姉のくだらない金儲けに付き合
ってる余裕なんてないんだ！　この意地汚い金の亡者め！　そ
んなに金が欲しいんなら、いつそ銀行強盗でもなんでもやっちなえ
ってんだ！　　いっつも俺が言いなりになってると思ったら大間違
いだからな！　　分かったか、この二重人格女！

ああ……。心の中だけでなく、本人を前にして堂々と叫んでみ
たい。その2秒後に天使のような笑顔のもと殺人が行われるにして
も、一度でいいから（ってか、2度目はないからな、多分）本人に
訴えてみたい。

ちくしょう……。どうして、俺だけがこんなに不幸なんだ。世
の中絶対間違ってる！

第1話・金常時春香（後書き）

第2話：金常時隼人（前編）

俺の名前は金常時隼人。^{きんじょうじはやと}15歳。どこにでもいる、平々凡々な高校1年生だ。

「ごるあ！ てめえ、誰だよ。文句でもあんのか、殺すぞごるあ！」

そう、俺はどこにでもいる平々凡々な高校一年生、のはずなのだが。

「ごるあ！ てめえ、なんか文句でもあんのかつつつてんだよ、ごるあ！」

さつきから、ごるあ、ごるあと新種の珍獣の鳴き声みたいな奇声をあげている、スキンヘッドの男の顔が、なぜか俺の眼前に迫っていた。顔中にピアスをちりばめたその様相は、新種の珍獣というよりは見たこともない宇宙人みたいだ。もっとも、宇宙人をこの目で直におがんだことはないが、まあ、そんなことはこの際どうでもいい問題は、なぜ平々凡々な高校1年生であるはずの俺が、柄の悪い不良連中に囲まれているのかということだ。

「ごるあ！ てめえ、黙って突っ立ってないで、なんとか言ってみろよ！ ごるあ！」

俺は仕方なく道路の真ん中に転がっている花瓶を指さした。1週間前、この通りの少し先にある交差点で、交通事故に遭い亡くなった子供への供え物だ。なんの花かは知らないが、小さな花瓶に挿された綺麗な一輪の花を昨日目にしていたので知っている。

散歩中、たまたま私は不良ですとアピールした身なりをした学生3人が、供え物の花瓶で楽しそうにはしゃぎながらサッカーをしている様子を、うわ……馬鹿丸だし……とか、若干引きながら思いつつ傍観していただけののだが、不運にも、はしゃぎつつもさりげなくこつちに顔を向けてきた珍獣スキンヘッド（たった今、命名）と目が合ってしまったがために、俺は今こうしてわけのわからない

因縁をつけられているというわけだ。

「そこに転がってる花瓶……」

俺は黙ってないで何とか言えというリクエストに、渋々答えた。

「ああ？　もしかして、お前、俺らがその花瓶でサッカーしてたとでも言いたいのかよ」

「おいおい。冗談じゃねえよ。俺らがやったって証拠でもあんのだよ。ねえ、ちー君」

「そうだよ、ごるあ！　てめえ、妙な言いがかりつけてつとぶつ殺すぞ、ごるあ！」

……いや、証拠もなにも、お前等今その花瓶で楽しそうにサッカーしてたじゃん。明らかに俺と目が合うまで楽しそうにサッカーしてたじゃん。ていうか、今こいつ

「サッカーしてたとも言いたいのかよ」

って言ったし。もし、この状況だけを見た人間ならいきなりその花瓶でサッカーしてたとは思わないよな。多分、けり倒したぐらいにしか思わないよ。お前、サッカーしてるどころ見られたから

「サッカーしてたとも言いたいのかよ」

って言ったろ。　とか思いながらも、俺がそこをツッコむことはない。別に、ツッコみベタとかそういうことじゃなくて、ただ、俺が無口な上に口下手な人間であり、人並みな平和主義なだけだ。

俺はわけのわからない因縁をつけてくる不良3人を相手にせずに、道路に転がっているひび割れた花瓶を道路脇にそつと戻してやった。

「てめえ、なにシカトぶつこいてんだよ！　ごるあ！」

「そうだよ。勝手な因縁つけてといてそれはないんじゃない？」

「君、世の中なめてるでしょ」

やめてくれ。それ以上俺に近づかないでくれ。俺は別にお前等と争うつもりはないんだ。そう思いながらも、作り笑いひとつうまくできないおれは、仏頂面で

「別に……」

と呟くことしかできない。もちろん

「別に」

お前等と争うつもりはないんだ、という意味をこめてのもののだが、今まで誰一人として俺の台詞の中身を器用に理解してくれた人間などいたためしがない。

「聞いた？ 別に、だって」

「あーあ。完全にけんか売られてるよ」

「いい度胸してんじゃねえか、ごるあ！」

ああ……。やっぱ、こうなのかよ。なんで、いつつもいつとも俺だけこんな目に。俺の他にもお前等のこと見てた人間いっぱいいたじゃん。ちよつと目つきが悪くて、ちよつと体が大きいからってなんで俺ばかり……。

「ごるあ！ 天国か地獄、どっちか好きなほういつてこいやあ！」
「……」

チンケな台詞と一緒に珍獣スキンヘッドの右拳が俺の左頬をめがけてうなりをあげた。ここで問題を起こしたくない俺は、ぐつと歯を食いしばって受け身の態勢をとる。が、眼前に珍獣スキンヘッドの拳が迫った瞬間、俺の脳裏に刻まれたある恐ろしい記憶が目覚ました。

天使のような笑顔のもと繰り出される、恐ろしく強烈な正拳突き。思いやりという言葉の意味をまるで理解していない、殺意の乗り移った高速の上段蹴り。意識もろろとして倒れ込んだ最後にうつすらとした視界の中に見た、情け容赦のないとどめの下段突き。

世にも恐ろしい記憶が、俺の防衛本能を刺激する。コンマ数秒後、俺の意思とは関係なく俺の右拳は珍獣スキンヘッドの顔面にめり込んでいた。

「あ……」

ちようどクロスカウンターの形で入った俺の拳は、珍獣スキンヘッドの鼻骨と前歯2本を見事にへし折って、珍獣スキンヘッドを吹き飛ばしていた。電柱柱に叩きつけられた珍獣スキンヘッドが
「きゃん！」

と子犬のような高い鳴き声をあげて、地面に倒れ込む。

「きゃあああ！」

「いやあ！」

「人殺し！」

「警察呼べ！ 警察！」

ピクリとも動かず地面にひれ伏す珍獣スキンヘッド。

その傍らに立ち尽くす俺。

周りから聞こえてくる悲鳴に怒号。

たちまち、逃げまどう人々と騒ぎを聞きつけた野次馬たちで、俺の半径15メートル以内の空間は、パニックに陥ってしまった。

また、やってしまった……。いつの間にか、春姉の恐怖が刷り込まれた俺の体は、熱いものに手を触れると思わず手を離す動作を無意識にとるがごとく、身の危険を感じると反射的に自分の身を守るようになってしまっているのだ。おまけに6歳の頃から約8年間、空手で鍛え込まれた俺の体は、無意識のうちにもその力を発揮してしまう。そのせいで、今まで俺がけちらした不良の数は50人は軽く越え、周りからは

「バーサーカー」

とか

「キラマシーン」

とか陰で呼ばれ続けてきたのだ。そんなもの、相手が勝手に襲いかかってくる以上、自分ではどうしようもないではないか！ 誰も好き好んで不良を半殺しにしているわけじゃないんだ！

いつの間にかできあがった人垣の中心で、俺は無性にやりきれなくなつてぶるぶると肩を震わせた。周りから聞こえてくる

「うわあ、なんかあいつ震えだしたぞ」

とか

「気持ち悪う」

とか

「あの目やばいよ」

とかいうささやき声が、俺の涙腺を容赦なく刺激する。

「ちくしょう！　俺だって好きでこんなことしてるわけじゃねえんだよ！　ってか、明らかにこれは正当防衛だろうが！」

そう叫んで泣きながら人垣をかき分けて駆け出すようなかわいい真似ができればいいのだが、維持とプライドが邪魔をしてそれさえもできない。もつとも、いつの間にか珍獣スキンヘッドの連れ2人はいなくなっていたので、俺の無実を証明する術はその時点で消滅している。俺に残された道はもはや仏頂面した悪役として、悠然とこの場を去るのみだった。

「う、うわ、こっち来るぞ！」

「に、逃げる、殺される！」

人垣をかき分ける必要もなく、野次馬は一目散に俺のもとから逃げ去っていく。そして、1人残らず逃げ去ったそこに存在するのは、ピクリとも動かない珍獣スキンヘッドだけだった。

誰も見ていないところで、俺はホロリと伝い落ちる一粒の涙をゴシゴシと拭った。道路の端っこに踏みつけられた一輪の花は、まるで今の俺そのものだ。

俺は優しく一輪の花を拾い上げて花瓶にさしやると、悠然とその場を後にした。

第3話：金常時隼人（後編）

春姉が俺を使つての金儲けを頼んできたのは、その後家に帰つてすぐのことだった。

先日この町に引越してきて、右も左も分らないがとりあえず学校までの道のりを覚えよう！　と少しドキドキワクワクの探検気分を始まって5分で無惨に、おまけに理不尽に打ち碎かれた弟の切なすぎる心境を知りもしないで、あの暴力二重人格女は……！

ふ……。まあ、いい。この際そんなことはもう今の俺にとつてはほんの些細なことに過ぎない。まあ、俺の心の叫びを本人にお知らせしたいという自殺行為に及ぶ自分が頭をよぎったりもしたが、冷静になりさえすればもうこっちのものだ。

思い返せば、長い道のりだった……。

つぶらな瞳の可愛らしい少年時代。その少年の前に広がった道が、苦難と苦痛とに彩られた並の修業僧なら裸足で逃げ出すほどの苦行の道であることを一体誰が想像できただろうか。

小学生時代。

極度のあがり症と口べた、無口な性格が災いしていじめの標的にされてしまった、あの頃……。

当時から周りより少し体格のよかった俺だが、その心優しさから悪質な嫌がらせをしてくる連中を

「ぶざけんな、コラア！　てめえら、そんな俺にぶつ殺されてえのか、ああ？」

なんて言つて、ぶちのめすなんてことはできるはずがなかった。だが、そのいじめは始まってたった三日で幕を閉じることになる。どこからか、俺がいじめられているという情報をかぎつけた春姉が、いじめの実行犯八人を容赦なく叩きのめしてしまった（文字通り）のだ。

当時からもう周りの大人も目を見張るほどの空手の才能を見せてい

た春姉の実力は、ルールなしの喧嘩にこそ、その真価が発揮された。相手が年下だったとはいえ、男子八人を相手に無傷で勝利を飾った春姉の武勇伝は、今でもその小学校で語り継がれていることだろう。春姉も、小学生の頃は俺にとって弟想いの優しい自慢の姉だったのだ。が、その強すぎる姉を持つてしまったがために、俺は悪ガキだけでなく普通のクラスメイトたちからも恐れられる存在になってしまった……。そして、だめ押しが

「あんた、弱いからなめられんのよ。でも、安心しなさい。私があるたのこと強くしたげるから」

の春姉の言葉だ。

俺が空手を習い始め、しかも伝説として祭り上げられている強さを持つ姉に鍛え込まれているという噂は、あつと言う間に学校中に広まってしまった。そして、とうとう俺に近づく人間は誰一人としていなくなってしまった。

もちろん、そんな状況の中で友達なんてできるはずもなかった。

本来、控え目な性格の俺が冷たい目を向けてくる人間に自ら話しかけるなんて真似ができるはずもない。クラスの席替え、様々な行事ごとのグループ決め、果ては毎日ある給食での自由席……。そのたびに俺はつまはじきに。だめだ。思い出ただけでも、胃の辺りがキリキリと痛くなってきそうだ……。

中学生時代なんて、それよりもさらに悲惨だった。

「新入生の中に、百戦錬磨の鬼神のごとき強さを誇る怪物がいる」という、一人歩きした噂に踊らされた顔の怖い先輩方が入学間もない新入生の教室に、しかも授業中にも関わらず乗り込んできた。

「こらあ！　こん中に金常時隼人って奴いるかあ！」

鬼のように怖い顔をした、明らかに喧嘩上等の先輩方がみんなお揃いの短ランにダボダボのズボンというファッションをして、ズカズカと教壇の前に並んで怒鳴り声をあげた。その瞬間、クラス全員の視線が俺に集中した。おまけに、席の間をぬって歩きながら教科書を片手に朗読をしていた教師までもが、離れた場所から俺に無表情

な顔を向けているではないか！

お前か、こらあ！
ちよつと面かせや！」

こうして、俺はクラスメイトにも教師にも見捨てられ、怖い先輩方に人気のない体育館裏に連れ込まれた。そして、その10分後、1人残らず気を失って地面をなめている先輩方は駆けつけた教師の手によって保護され、1人歩きした噂に裏付けをしてしまった俺の辿った道は、もう説明する必要はないだろう……。

だが、そんな悲惨な俺の人生もここまでだ！
なぜなら、そ

引越しだ！ 先日、俺は15年慣れ親しんだ町を捨ててこの町に引っ越してきた、つまり！ 誰も、俺のことなんて知らない！

人生やり直せるということだ！

親の仕事の都合で、引っ越しをしなければならない。

その朗報を耳にしたとき、俺は歓喜に打ち震えた。

嬉しさのあまり思わずその場にいた春姉に抱きついたりして、危うく命を失いかけた。

$$\begin{matrix} \bar{1} \\ \bar{1} \\ \bar{1} \\ \vdots \end{matrix} \circ$$

ここからだ。ここから、俺の人生は輝きたす。これから、夢にまで見た楽しい学生ライフの始まりだ。なんせ、転校生がクラスの人気者に、なんてパターンはわりとよくある話だし、うまくいけば俺もってか！

新しい学校では数え切れないほど友達作るんだ！

休憩時間には絶えず仲のいい友達と談笑して、意味もなくつつき合ったり、ふざけ合ったりするんだ！　部活なんてのにも入って、仲間と青春の汗を共に流したり、できればその……彼女なんてのも作ってみたいして！

待ってるよ、青春！
まだ見ぬ仲間たち！俺の人生、ここからが本番だ！

第4話：登校初日！（その1）

ついに、初登校の日がやってきた。俺は昨日から徹夜で作った自己紹介の挨拶文を書いた紙に目を通して、最後のおさらいをする。

「どうも初めまして。金常時隼人です。まだ、こっちに引越してきて間もなくいろいろな勝手が分からないんだけど、よろしくね。

あ、僕のことには金ちゃんって呼んでください。前いた学校じゃ、みんなからそう呼ばれてたから（うそ）。でも、あらかじめ断っておくけど欽ちゃんの物まねはできないよ。ハハハ！」

ここでスマイルだ！　と口の端を持ち上げたところで

「あんた、さっきからなにぶつぶつ言ってるのよ」

と春姉の声が背後から響いてきた。驚いて振り返ると、閉め忘れていたドアの前に、冷めた目をした春姉が立っていた。

「は、春姉……」

「なに、1人でぶつぶつ言ってるのよ、あんた」

「は、春姉には関係ないだろ」

「ま、そうね。せいぜい、ポカしないようにがんばんなさい。どうせ、無駄だろうけど」……」

……お見通しつてわけか。

「そんなことより、昨日頼んだこと忘れんじゃないわよ」

「……分かってるよ。用がないなら早く出てってくれよ」

「はいはい」

春姉はさっさと俺の部屋を出て、リビングへと入っていった。俺は、春姉の後ろ姿をほんの少しの間だけにらんでから、ドアを勢いよく閉めた。そんなことよりだあ？　ふざけんじゃねえ！　なにも知らねえくせに勝手なことやってんじゃねえ！　この紙切れに書かれたことうまく言えるかどうか、今後の俺の生き方を大きく左右するんだよ！

俺は、頭にきて外に決して声が漏れないように、それでいてストレ

スが解消できる程度に声を大きくして言ってやった。

「隼人。母さんがさっさと朝ご飯食べろって」

「この二重人格女！ お前の頼みなんて誰が聞いてやるかよ！
バーカ！」

突然開かれたドア。そこからのぞく春姉の顔。部屋の中に反響する俺の怒鳴り声。俺は啞然として、部屋に入ってくる春姉の可愛らしい笑顔を見守りつつ、後ずさった。

「……ねえ。二重人格女って……私のこと？」

「ち、ちが……」

後ろ手にドアを閉めて、春姉はゆっくり俺に迫ってきた。

ボタン！

ドアの閉まるすさまじい音と一緒に、俺の悲惨な一日は幕を開けたのだった。

第5話：登校初日！（その2）

不慮のアクシデントに見舞われた俺は、それでも何とか生き延びて無事（？）新たな高校のクラスメイトたちの前に立っていた。どうやら、春姉は実の弟に

「ボコボコに腫れあがった顔で自己紹介をさせるのはちょっとかわいそうかな」

とでも思っただろう。

そんなあるかないかの思いやりのおかげで、俺は腹だけを集中的に痛めつけられ、朝ご飯を食べるよう呼びに来た姉に朝ご飯を食べられなくされたのだった。そんなこんなで、俺にとって一世一代の大勝負は理不尽にも、最悪のコンディションで望まざる終えなくされてしまった。が、そんな不幸も忘れてしまふほど、俺は今感動していた。

自己紹介のため教壇の前に立つ転校生。そして、新しい仲間に向けられる興味と歓迎の込められたまなざし。そう、まさに夢にまで見たシチュエーションのまったく中に俺は立っているのだ。

ああ……。人からこんな目で見られるのは初めてだ。陰口をたたかれる以外でひそひそ話をされるのも初めてだ。あ、おまけに

「けっこう、イケてんじゃない？」

なんて声まで聞こえてきた。おお！ あその女子、俺と目が合うとウインクしてきたぞ！ こ、これはもう ムフフ……ってか！

「じゃあ、金常時君。簡単に自己紹介して」

担任の黒縁眼鏡をかけた冴えない男教師は、俺の簡単な紹介を済ますと教壇の前を俺に明け渡した。

俺は堂々と教壇の前に立ち、改めてクラスメイトたちの視線を一身に受けながら昨日徹夜で暗記した台詞を言葉にしようとした。が、カラカラにのどが渴いてしまって、うまく声を出すことができなかった。

った。おまけに、いつの間にか足がガクガク震えだしてきたかと思うと、自分が今なにをされていてこれからどうすればいいのかということさえも、突如として分からなくなってしまった。

そう、俺は本来極度のあがり症であり、口ベタ、おまけに控えめな性格の持ち主だったのだ。すっかり舞い上がって忘れてしまっていたが、冷静に考えてみればそんな俺がこんな大勢の前で堂々としてしゃべるなんてできるわけがない。ましてや、

「よろしくね、ははは！」

なんてこと絶対無理だ。ってか顔固まってんのにどうやって笑えてんだ。

「どうしたの？ 金常時君」

担任の教師が怪訝な顔をして俺の顔をうかがう。クラスメイトたちがどうしたのかとざわめきだす。マ、マズイ……！ 早く何か言わないと、このままじゃ夢に描いた俺の楽しい学生ライフが本当に夢のままで終わってしまう！

俺は意を決して、声を絞り出した。この際、もう笑顔も台詞もどうだっていい。とにかく一刻も早くこの窮地から脱出しなければ、俺の人生お先真っ暗になっちまう！

「……よろしく」

しかめっ面から放たれた短すぎる自己紹介の台詞に、返事を返そうとするクラスメイトは誰一人としていなかった。おそらく、無愛想な一言だけでクラスメイトたちは俺がどういう人間であるかを理解したのだろう。多分みんな、俺の一言を

「夜路死苦」

と受け取っている。

確かに、こういう場で

「よろしく」

としか言えないような人間は、シャイで恥ずかしがり屋というかわい性格の持ち主か、粗暴な性格の持ち主くらいだが 俺は決して後者に当てはまる人間ではないのだ。なのに、この見慣れた反応

は何だ？ さっきまでの歓迎ムードが一転して険悪なムードに押し包まれているのはどういうことだ？

「……え、えー、じゃあ、金常時君は席について。君の席は、桂木君の隣だから」

空いた席を見つけて、俺は隣の席の女子生徒に目をやった。その女子生徒は、まさにさっき俺にウインクをしてきた女子生徒だった。俺は、かすかな淡い期待を胸に、彼女の目をじっと見つめた。が、ウインクどころか彼女は俺と目が合うと気まずそうに目を伏せてしまったではないか。

俺の背中を冷たい汗が流れ落ちていく。俺の夢に描いた楽しい学生ライフは、始まって5分もせずにもろくも崩れさるうとしていた。

第6話：登校初日！（その3）

もしこの世界に神が存在するのなら、なぜ神は俺にだけこんな過酷な試練を与えたりするのだろうか？　などと現実逃避に神を持ち出しなから、俺は屋上の片隅に寝っ転がって視界いっぱい広がる果てしなく青い空をぼんやりと眺めた。

終わった……。俺の夢に描いた学生ライフは、始まりもせずにならなくなった……。

まだ、あの自己紹介までならよかった。あの時点までなら、クラスメイトの俺に対する恐怖も、慣れてしまえば

「なーんだ」

となってしまう程度のものだったのだ。

そう。長くつき合ってくれば、誰だって俺がむやみやたらと人を傷つける粗暴な人間では決してないことを分かってくれるはずだ。それなのに、何の因果かいつも俺にはそのつき合いを元から絶ってくるトラブルがタイミング悪くふりかかってくる……。俺は、もう忘れようと自分に言い聞かせながら、ぎゅっと瞼を閉じた。だが、あの忌まわしい記憶は瞼の裏にまで張り付いて俺を苦しめるのだった。

自己紹介を外してしまったせいで、昼休みに入っても俺に話しかけてくる人間は未だに1人としていなかった。このままではまずい。そう思いながらも、自分から見ず知らずの人間に話しかけるという行為に及ぶことのできない俺は、人の輪から外れてひたすら誰かが優しく

「ねえ、金常時君」

なんて声をかけてくれるのを待っていた。教室の中は、いくつかのグループに分かれて、みんな楽しそうに仲間と談笑しながら昼食をとっていた。俺は机の中に持参した弁当を隠しながら、そのときをひたすら待ち続けた。

「ねえ、金常時君。よかつたらこつち来て一緒に弁当たべない？」
そのときに備えて準備は万端だ！

仲間と談笑しながら弁当を食べる。そんなことが、俺の人生の中に一度としてあっただろうか？ いや、ない。ありはしない。だが、それももう今日までだ。俺は、今日から生まれ変わるのだ……！

と密かに握り拳を握っていると、突然背後から

「ねえ、金常時君」

と声が響いてきた。俺は幸福のあまりピクリとも体を動かさずに、声の主の次の言葉を待った。しかし、待ちに待った次の言葉は、俺のまだ見ぬ楽しい学生ライフを粉々に打ち砕くカウントダウンの始まりだった。

「君って金常時君っていうんだね」

「俺たちのこと覚えてる？」

「忘れたとは言わせねえぞ、ごるあ！」

聞き覚えのある、新種の珍獣の鳴き声のような奇声を聞いて、俺は旋律を覚えた。声の主は俺の目の前に回り込んできて、その姿をあらわにした。

間違いなく、昨日俺に訳の分からない因縁をつけてきた不良三人組だった。

「お、おい。あれって三組の高橋たちじゃん」

「あいつら、停学解けたのかよ」

「それよりさ、あいつらと金常時知り合いみたいだぜ。やっぱ、金常時ってやばい奴なのかな」

クラスメイトの声が、俺を激しく動揺させた。

それにしても、こいつらがまさか同じ学校の生徒だったとは……。

俺って奴は、一体どこまで運のない人間なのだ……。

「ごるあ！ てめえ、昨日は不意打ちなんて汚ねえ真似しやがってよお！」

「そうだよ。それでちー君、やられちゃったんだよなあ」

「ほんと、汚ねえ奴だぜ」

一通り、

「こいつは喧嘩に勝つためなら、不意打ちも平気でする汚い奴」

という汚名を俺に着せた不良三人組は、今度は思い出したように俺に詰め寄ってきた。もっとも、詰め寄ってきたのは例の珍獣スキンヘッドだけで、残りの2人は後ろに控えている。

「ごるあ！ 昨日は不意打ちなんて汚ねえ真似にしてやられたけど、今日はそうはいかねえぞ、ごるあ！」

珍獣スキンヘッドは俺の前の席の机を蹴り倒して、俺の眼前に醜い顔を寄せてきた。たちまち、教室の中は険悪なムードに包まれた。

しかし、鼻に取り付けられた固定具はとにかく、前歯2本が抜けたその顔はどう見ても間抜けにしか見えない。そして、その間抜け面した奴に俺の今後が左右されているかと思うと、言いようのない情けなさとしようもなさ俺の頭はクラクラした。

「おい、ごるあ！ てめえ、俺の舎弟になんら許してやつてもいいぞ、ごるあ！」

珍獣スキンヘッドはそう言って、煙草臭い息を俺に吐きかけた。

こいつの舎弟？ 冗談じゃない。そんなことになったら、楽しい学生ライフどころか俺の周りには誰も人が寄りつかなくなるではないか。

「……断る」

「ああ？ 断るだと、ごるあ！」

「てめえ、ちー君が下手に出てるからって、つけあがるなよ」

「痛い目見たいのかよ、こら」

なるべく、相手の気を逆立てないようにやんわりと断ったつもりだったが、それもどうやら無駄に終わったらしい。不良三人は、意味

もなく机や椅子に当たり散らし、クラスメイトに多大な迷惑をかけた。そして、俺に手を出せない様子の珍獣スキンヘッドは、あるうことが無関係のしかもか弱い女子生徒に訳の分からない因縁をつけ始めたではないか。

「ごるあ！　てめえ、なにじろじろ見てんだよお！　見せ物じやねえんだぞ、ごるあ！」

ごめんなさい、と怯えた顔をして謝る女子生徒に、珍獣スキンヘッドはなおも訳の分からない因縁をつけたうえに、手持ちの因縁を使い尽くすと言葉につまって、女子生徒の頬に容赦なく平手打ちををしました。

「思い知ったか、ごるあ！」

元来、正義感の強い俺がそのまま傍観し続けるなんてできるはずもなかった。俺は席から立つと、なおも女子生徒をいびり続ける珍獣スキンヘッドの背後に立つて、その肩をつかんだ。

「ああ？　なんだ、ごるブツ！」

俺の右拳は珍獣スキンヘッドの顔面を貫き、またも鼻骨と前歯二本をへし折って、珍獣スキンヘッドを数メートル吹き飛ばした。

倒れる机。乱れ飛ぶ悲鳴。絶叫。たちまち、クラスメイトたちは教室の中から俺1人を置いて1人残らず逃げ出し、またしても俺は気を失った珍獣スキンヘッドとともにその場に残されたのだった。

第7話：登校初日！（その4）

それから、情状酌量の余地もなく1週間の停学を言い渡され、午後の授業を残し俺は家へ強制送還された。

そして、停学が解けてからは、騒ぎを知った不良連中から毎日のように挑まれ、果ては、腕に覚えのある空手部の主将と名乗る人物までが、俺の極悪非道ぶりを見過ごせないと勝手に喧嘩をふっかけてくる始末だ。さらに悪いことに、その人は数日後に3年生として最後の公式試合を控えていたらしいのだが、俺にやられた傷が癒えず、涙を飲んで出場を辞退したらしい。

「聞いた？　桂木先輩、金常時に怪我させられて最後の大会出られなかったんだって」

「あいつ無差別に人襲いまくってるって噂だぜ」

「目が合った人間片っ端からやつちゃうんだって」

「見るよ、あの目。おっかねー」

「あいつそのうち人殺しちゃうんじゃない？」

引越して来て一ヶ月足らず。俺の夢に描いた楽しい学生ライフは、儚く泡のように消え去ってしまった。そして、残ったのは学校に来るのはいいが、意味もなく恐れられるために屋上にしか居場所を見つけられないという、寂しくて切なすぎる現実だけだった。

「ちくしょう……」

確かに、俺は身長180センチ、体重70キロと恵まれた体格をしている。

顔だって細面ながら、鷹のように鋭い目をしており、穏やかな微笑みなどとは無縁のようなつくりだ。

さらに、口ベタで自分の意志をうまく相手に伝えることはできないし、極度の照れ屋な性格から、感情を表情で表すことも苦手だ。

これだけの悪条件がそろえば、一見して粗暴な人間に見られるのは仕方のないことだと思う。

でも！　でもだ！　お前等の言うように、俺が一度だってむやみに人を傷つけたことがあるか？　確かに、身を守るためとはいえ、数多くの不良たちをけちらしてきた。でも、それは俺が自ら望んでそうしているわけではないのだ。なるべく穏便に済ませようとする俺の気遣いを無視して、不良どもの方から一方的に手を出してくるのだ。迎え撃つほかがないではないか。

第一、俺に粗暴さがあるにしても、いつだってその粗暴さは正義感という方面でのみ発揮されている。

そう、俺はサッカーに使われている供え物の花瓶を元に戻して、理不尽に絡まれている女子生徒を助けてあげただけじゃないか。それなのに、どうしてこうなっちゃうんだ……？　誰も俺の中身を見ようとしんない。分かるうともしてくれない。見てくれだけで勝手な想像を膨らませて、知ったような顔をして俺を遠ざける。

どうして、俺だけがこんな目に遭わなければならないんだ……。

「なんで、俺だけ……」

ポツリと呟いてみると、ますます虚しさがこみ上げてくる。いつそのこと、ここから飛び降りて楽になっちゃおうか。穏やかな青色の空を眺めながら、軽く自殺願望にとらわれかけたとき

「うるあー！」

と、どこから突然怒鳴り声が響いてきた。自殺に向かっていた俺の意識は、自然とその怒鳴り声に引き寄せられた。それは、神様が俺の自殺を止めるために与えてくれた幻聴というプレゼントだったのかも知れないが、俺はすぐに思い直して身を起こした。

今度は複数の怒鳴り声が聞こえたからだ。

屋上からは校内のほとんどもを見渡すことができる。

怒鳴り声の元を辿ってみると、老朽化が進み今は使われなくなった校舎の裏で、複数の不良たちが1人の男子生徒を取り囲んでなにやら楽しそうに暴行を加えているではないか。しかも、その不良たちというのが俺の中のもう2度と顔も見たくない人間ランキングベス

ト5に堂々入る、あの珍獣スキンヘッドとその連れ2人と判明した瞬間、俺の気分はブルーゾーンを越えて、憂鬱の渦の中へ放り込まれた。

一通り気の弱そうな男子生徒を痛めつけ終えた珍獣スキンヘッドたちは、彼の財布から有り金すべてを奪い取ると

「これだけかよ、おい。しけてんなあ。次会うときは10万用意しとけよ」

などと無茶な要求をしておいて、その場を去っていった。

俺はぼろ雑巾のようになり果てた哀れな男子生徒に目を留めた。

虚弱を絵に描いたような、鉛筆を連想させる細い体。中途半端に伸ばされた出来損ないのロングヘア。目元まで伸びた前髪が、大きな黒縁の眼鏡にかかり、その合間から時々のぞく弱々しい瞳が、暗いイメージにアクセントを加えている。まさに、不良に絡まれる為に存在する人間が、たった今不良に絡まれて地面にうずくまっていた。

気のせいかな、俺はその男子生徒を知っているような気がした。しかし、いくら考えてみても名前は浮かんでこない。やはり、ただの思い過ごしだろうか。

考え込んでいるうちに、けたたましいチャイムの音が響いた。ぼろ雑巾のようになり果てた男子生徒は、ゆっくり起きあがると、その場から立ち去っていった。

第8話：初恋……！（その1）

結局、今日も一度として授業に出ることもなく俺は学校を後にした。
あの悲劇の初登校から、早一月。

初めのうちは、もしかすると授業をサボッて屋上で昼寝をする不良生徒と、先生の言いつけで不良生徒をたしなめにくる、学級委員の飛びきり美人の女の子との運命的な出会いがあるかも……！　なんて、こりもせず淡い妄想を繰り広げてみはしたが、やはり、現実には真冬の季節に冷水を頭からかぶるがごとく冷たかった。学級委員の飛びきり美人の女の子どころか、人っ子1人俺を呼びに来る人間などいやしない。それだけならまだしも、屋上に来た人間は俺と目が合うと

「ひい」

と短い悲鳴をあげて、きびすを返して逃げていきやがる。

なにか？　俺は檻の中に閉じこめられた凶暴なライオンなのか？

お前等は、檻の中に放り込まれたとってもおいしそうなえさなのか？

どう見たって同じ人間だろうが！

そうして、屋上は悲しくも俺のプライベートルームと化してしまった……。誰かが呼びに来てくれるかも……。！　などと、ドキしながら寝たふりして待っている俺のかわいいところなんて、この冷たすぎる現実の中では救われようもなかった。

大体、俺は根が真面目な人間だ。

そこら辺にいる自ら勉学を放棄している不良どもと違って、できることなら高校生としてそれ相応の勉学に励むことを強く望んでいる。頭だつて、自分で言うのもなんだが、いい。

中学時代も、ともに授業に出られなくても（出ないのではなく）テストでは平均80点以上を常にキープしていた。

分かりやすく解説されたノートもなく、どこが大事でどこがテスト

に出るといふヒントも全くない状況で、だ。陰の努力を語り出すと思わず握り拳を作って力説してしまうほど、俺はがんばり屋さんなのだ。しかし、それもありません。カンニング疑惑や、答案用紙盗難疑惑が持ち上がり俺は勉強をしないであることを余儀なくされた。それから、成績ガタ落ちだ。親からもとうとう見放されたさ。

「勉強だけがあんたの取り柄だったのに……」

絶望して泣き出す母親のその台詞は、今も俺のもろくてとつてもナイーブな心の真ん中に大きな風穴を空けている。あ、思い出すと今も涙がこみ上げてきた……。

世の中は真つ暗だ。俺の歩いている道に、光はもう差し込みはしないんだ。ちくしょう！　もうたくさんだ！　そんなに俺を悪い人間にしたいなら、お前等の望み通り傍若無人な極悪人になつてやろうじゃねえか！　目が合った人間片っ端から無差別に襲つてやる！　こうなつたのも、全部お前等のせいだからな！　俺はこの冷たすぎる社会の生んだ哀れなバーサーカーとして、人類全員に噛みついてやるんだ！

と、自暴自棄のどん底につき落ちていた俺が、なぜこの一月の間毎日刑務所のような（なんの楽しみもないという意味）学校に通い続け、猛り狂った破壊衝動に身を委ねなかったのかという……。俺は携帯電話で時間を確認しながら、人で賑わう商店街を早足で抜けた。商店街を抜けた少し先にある交差点に着くと、そこで足を止めてもう一度時間を確認する。

もう、そろそろだ。俺は携帯の待ち受け画面をのぞきながら、とりあえず道路の端っこに突っ立っていても周りから変に見られない状況を作り上げた。もちろん、目だけは目と鼻の先にある交差点に集中している。

「……！」

来た！

目と鼻の先にある交差点を、いつものように急いだ様子で小走りに横切っていく、すばらしくきれいな美少女。充分に高鳴っていた俺

の胸が、さらにヒートアップして俺の目はその美少女に釘付けになる。

彼女が俺の視界に留まっているのは、ほんの2、3秒ほどの間だけだ。そして、その2、3秒のためだけに、俺は毎日なんの楽しみも待っていない学校に通っているというわけだ。

これは、つまり……恋、というやつだ。俺は名前も歳も、一切素性の知れないその美少女に恋をしてしまっているのだ。

15年生きてきた中で、恋なんて一度もしたことがない（っていうか、俺に近づく女の子なんて全くといっていいほどいない）俺が、恋なんてもの話の中でしか知らないような俺が、恋をしている……。というか、多分これは恋というやつだ。恋というやつは、綿飴のようになめらかで甘い、夢のような心地よさを感じさせてくれるものと、いつか春姉が言っていたからな。

あの時は、恋する乙女の演説に適当な生返事を返してひどい目にあった。ちょうど春姉の性格が歪みだしたのも、その後、恋する乙女が「恋なんて2度とするもんか！」

と猛り狂ったあたりからだ。

あの時は、春姉の部屋に監禁されて、失恋のやけ酒に無理矢理つき合わされた上に、怒り兼八つ当たりの高速上段回し蹴りを側頭部に見事にきめられ、天国の階段を昇りかけた……。おまけに、目を覚ますと知らないうちに自分の部屋に戻されて、空の缶ビールが10本以上俺の部屋に放置されていて、一滴もアルコールを摂取していないにも関わらず、両親にもすごい説教を受ける羽目になった。翌朝、春姉は体調不良で学校を休んだ。多分、ってか間違いないく二日酔いだ。とまあ、そんなこんなで俺は間違いなく恋をしている。それも、初恋だ。

よく初恋は実らない、などという台詞を聞いたりするが果たしてそれは本当なのだろうか。もしそれが本当なら、確実に俺の人生お先真っ暗だ。ってか、破壊衝動を抑えてくれたこの恋が果てた時、俺は一体どうなっちゃうんだ？

あの、無茶苦茶な破壊衝動プラス、失恋で絶望のどん底に突き落とされた俺が、その時この冷たすぎる社会に下す決断は。

ためだ……。

犯罪者になった未来の自分がありありと浮かんでくる。今はこれ以上深く考えるのはやめておこう。

俺の歩む真つ暗な道に、一筋の光が差し込んだ。

今は……うん。

そういうことにしよう！

第8話・初恋……！（その1）（後書き）

第9話：初恋……！（その2）

はつきり言つて、俺は女の前に美人とかかわいいとかいう単語がつく異性が苦手だ。もちろん、嫌いな訳じゃない。でも、見近にいる女の前に美人とかかわいとかいう単語がつく異性をずっと見てきているので、どうしても警戒してしまうのだ。

そんな可愛い顔して、実は金にがめついんじゃないかとか。

そんな華奢な体して、実は素手でコンクリートブロックを軽々と打ち砕いてしまうんじゃないかとか。そんな愛くるしい笑顔して、実は兄弟だけにはその本性をあらわにし、自分のストレス解消の道具に利用しているんじゃないかとか。つい、そんな現実離れした疑い（そんな女が現実に存在しているが）をかけてしまうのだ。つまり、俺は外見だけで人を判断するような人間では決してない。自分がそれで苦労してきて、軽い人間不信に陥っているということもあるが、外見だけで俺が誰かに惹かれるなんてことはまずあり得ないのだ。そつ……。つまり、こうなったことにはそれなりの理由があるのだ。

それは悲劇の初登校から一週間。停学が解けた翌日のことだった。

「うわあ、金常時だ」

「停学解けたのかよ」

「ねえ、あの死神もしかして今日から毎日学校出てくる気かな」

「げえ……」

教室に入った瞬間注がれる、クラスメイトたちの冷たいまなざし。俺を遠巻きにして聞こえてくる、ひそひそ話。俺のいない間に、ど

うやら俺の愛称は

「死神」

に決まったらしい。その意味は知らないが、どんな意味を込めてのものなのかは大方想像はつく。

っていうか

「げえ……………」

って……。そんな人の顔見てあからさまに嫌そうな顔して、嫌そうな声だすなよ。どんな言葉より、なにげにそういうのが一番傷つくし……………。

登校初日、いきなり暴力沙汰を引き起こしてしまった以上、ある程度の覚悟はしていた。でも、現実にもう夢に描いた学生ライフが2度と夢の世界から舞い降りはないことを痛感すると、俺の目から自然と涙がこみ上げてきた。俯いて、肩を震わせながら涙を堪える。そんな俺を見て、クラスメイト達がまた怯え出す。

ちくしょう！

俺はいたたまれなくなつて、悠然と教室から出ていった。例え、忌み嫌われている状況でも、30人以上の人間に注目されては緊張してまともな弁解などできるはずもない。ってか、あの時助けた女子生徒が

「金常時君！　あの時はどうもありがとう！　金常時君って、

見た目はちょっと怖いけどとても優しい人なのね！　お友達になりましょう！」

なんて申し出てくれることを密かに期待していたのだが、俺と目が合うなりその女子生徒は俺からささず目をそらしてしまった……。まあ

「暴力を振るう人間に優しいもくそもない」

と言われればそれまでだが。

それにしたって……………。

……………駄目だ。もはや、文句の一つも浮かんでこない……………。

行くあてをなくした俺は、一人寂しく屋上へ続く扉を押し開けた。

夢も希望もなく、時間だけが過ぎていく。屋上の片隅に寝っ転がりながら、俺は目を閉じてなにもかも忘れようとした。それから、いつの間にか眠りについていた俺が目を覚めたのは、顔になにか冷たいものが当たったからだった。なんだ？

まさか、クラスメイトの誰かが居眠りををしている俺にいたずらをして

「こんなところでサボってんじゃねーよ、金常時。ほら、教室に戻るうぜ」

なんて言って俺を呼びにきてくれたのでは！　などと寝ぼけながら考えもしたが、すぐにその考えは俺の思考が目覚めるとともに虚しく消え去った。

周りには人っ子一人いやしな。俺の顔に当たった冷たいものの正体はただの雨だった。

「なんだよ……」身を起こしてがっくりと肩を落としながら、次第に雨足が強くなってきたので俺は枕代わりにしていた鞆をひつつかんで、慌てて屋内に避難した。自分がどれだけ寝入っていたのか確かめるために、ポケットから携帯を取り出す。

4時30分。

……もう授業終わってんじゃん。ってかほったらかしかよ……。

俺はため息をついて、とりあえず教室へ足を運んだ。案の定、教室はすでに戸締まりがなされた後でクラスメイトもみんな出払った後だった。

仕方なく、家に帰るために下駄箱へ向かう。と、たどり着いたそこには、降りしきる雨を前にいかにも傘を忘れて困っという女子生徒が、下駄箱の前で立ち往生しているではないか。今日の天気予報は晴れのち曇り。しかも、降水確率は20パーセントだったので相当神経質な人間が用心深い人間ではない限り、傘は用意していないだろう。俺は少し離れた廊下の先から、その女子生徒を観察した。さして特徴のない、真面目で純朴そうな女子生徒だった。派手に着飾ることもなく、化粧もしていない。この手の人間なら、もしかし

たら大丈夫かもしれない。

俺はゆっくり下駄箱に近づいて、上履きから靴にはきかえた。鞆からもしもの時に備えての折りたたみ傘を取り出して、女子生徒の後ろに立つ。女子生徒はすぐに俺の気配に気づいたらしく、びくつと肩を震わせたかと思うと、ぱつと後ろを振り返った。

身長差の関係で、女子生徒の目は俺の胸元辺りに注がれていた。それから、女子生徒の目がいかにも恐る恐るといった感じで、ゆっくりと上へと這い上がってくる。

「ヒッ！」

俺と目が合うと、女子生徒は短い悲鳴をあげて、大雨の中を一目散に走り去っていった。しまった。

別にとつて食おうってわけじゃないのに……。そりゃ、確かに無言で背後に立ってた俺も悪いけど、ってか、俺はそんなに怖いのだろうか？ 雨の中に身を投じることを迷っていた人間に、なりふり構わず大雨に自分の身をさらすことを選択させてしまうほど、俺は恐ろしく見えるのか？

いつものことながら、軽く傷つきながら折りたたみ傘を開いて学校を出る。いつそのこと、この雨に身をさらしてしまいたい気分だったが、いちいち落ち込んだ気分につき合っていたらきりがないので、止めておいた。

学校を出て5分ほど歩くと商店街が見えてくる。そこを抜けて、その通りをまっすぐ10分ほど歩いたところが俺の自宅だ。

こつちに越してきたときは、雨の中を一人寂しくとぼとぼ歩く自分なんて想像もしていなかった。というより、考えようとしなかった。自分はきっかけさえあれば変わることができる。俺はそう信じていたんだ。だが、現実はそのようなシュークリームのようにおいしくも甘くもなかった。

「はあ……」

ため息を一つ吐き出したちょうどその時、不自然な光景が俺の目に映った。

この大雨の中、しかも道路の真ん中に傘もささずに一人の少女が突っ立っていたのだ。こちらからは後ろ姿しか見えないが、その人物が女であることは間違いなかった。背はあまり高くないが、身に着けている制服からは高校生か中学生らしいことぐらいしか判断できない。俺は足を止めて、少し先にある少女の後ろ姿を見守った。

この雨の中、傘もささずになにやってんだ？

しばらく様子をうかがっていても、少女はぴくりとも動く素振りすら見せずにその場にたたずんでいた。少しうつむき加減にたたずむ少女の後ろ姿は、まるで大雨の線に紛れてそのまま消え入ってしまった。いそうなほど弱々しいものだった。

「……くそ」

やめておけばいいものを、俺はつかつかと少女のもとへ近づいていた。それで、さつき痛い目をみたばかりなのにこういうときにどうしても無視を決め込むことができない自分の性格が恨めしい。

俺は手を伸ばせば届くぎりぎり離れた距離まで少女に近づくと、背後から少女の頭上に傘を持っていつてやった。ある程度距離を置いたのは俺の気遣いだ。もっとも、それも気休めにもなりはしないだろう。この少女もきつと、振り返って俺と目が合った瞬間悲鳴をあげるに決まっていた。ちくしょうめ。と心の中でヤケクソになっ

っている、少女がゆっくりと俺の方を振り返った。

例のごとく、その視線は俺の胸元に注がれ、それから恐る恐るといった感じで上へと這いあがってくる。ああ、やっぱり同じパターンだよ。くそ。次は悲鳴をあげて俺の元から逃げていくんだ。

パツチリと開かれたつぶらな少女の瞳が、俺の目を捉えた。だが、少女の瞳に恐怖の色は浮かばず、それどころかそこには感情そのものも感じることができなかった。その少女のきれいに整った顔立ちからのぞく不思議な印象の瞳は、確かに俺の心を惹きつけていた。

が、ちよつと待て。待ってくれ。

な……なんで、逃げないんすか？

予想外の事態に俺はうろたえるしかなかった。

なんと、その少女は俺と目を合わせても、逃げ出すどころかじつと俺の目を見つめ返しているではないか。悲鳴の一つもあげもせずにありえない状況に、俺は金縛りにあつたがごとくピクリとも体を動かすことができなかった。それでも、さすがにこの状況でいつまでも無言でいるわけにもいかず、俺は意を決してのどの奥から声を吐き出した。

「か、かかかかかか」

訳すと

「傘持つてないの？ 無理ないよね。今日天気予報じゃ雨降らないって言つてたからさ。でも、このままじゃ風邪ひいちゃうよ？」

俺の家すぐそこだからさ、よかつたらこの傘使つてよ。ね？」

降り注ぐ雨の冷たさと極度の緊張のせいで、俺の口は冒頭の1文字をひたすら連呼することしかできなかった。

うん。明らかに怪しい男だ。こんな男に意味もなく優しくされるのは、もはや嫌がらせ以外のなにものでもない。ってか、この手の俺の行動を優しさと受け取ってくれた人間など、今までいたためがない。しかし、少女はまるで俺の言葉の意味を分かってくれたみたいに、可愛い顔顔を柔らかく微笑ませて

「ありがとう」

と言葉を発したではないか。俺はあまりの出来事に、完全にフリーズ（行動不能）してしまった。

差し出した傘は少女だけを守つて、大粒の雨は容赦なく俺の体を濡らしていた。少女はそんな俺をしばらく見つめてから、小さく会釈をすると傘から出ていった。

「……！」

誰もいなくなつた空間に傘を差し出したまま、少女の後ろ姿が雨の線の中に消えていくのを俺はじつと見守つた。

これは、夢か？ …… ああ。夢だな。夢に決まつてる。俺はほつぺたを思い切りつねつてみた。そんなベタな方法しか取れない

ほど、俺は動揺していたのだ。

道路の真ん中で、広げた傘を使いもせずにはっぺをつねって

「いて！」

と声をあげている。どこからどう見ても、おかしい人間だ。この瞬間をクラスメイトに目撃されたなら、おそらく明日から俺の愛称の前に

「変人」

という単語が加えられることだろう。と、まあそんなことは置いといて、確かな痛みとともに俺はこれが夢じゃないことを痛感した。まさか、こんな冷たい世界の中に俺に微笑みかけてくれるような人間がいたなんて……。

俺を見ても、怯えずに

「ありがとう」

なんて言ってくれる女の子がいたなんて……！

俺は感動にうち震えた。あの娘は、この冷たすぎる社会に舞い降りた、たった一人の天使だ。いや、人間であることに違いないが、とにかく天使だ。マイ、エンジェルだ！

幸福を感じることに慣れていないせいか、こんなときにいい例えも思い浮かばない。

と、とにかく……！

あ、あの娘とお近づきになりてえええ！

第9話・初恋……！（その2）（後書き）

第10話：初恋……！（その3）

俺を見ても怯えないということは、心が綺麗な証拠だ。俺の、この意味もなく相手を怯えさせてしまう特性も、こういうことを計ることだけには役に立つのだ。もっとも、俺を見ても怯えない女の子が見近にいるが、その場合だけは例外だ。その女の子の場合はただ単に俺よりも喧嘩が強いわけで、怯える必要などこれっぽっちもなく、その心は……。

とにかく、その翌日から俺は学校が終わると彼女と出会った周辺を中心に彼女の搜索を開始した。そして、苦労の末ついに彼女がいつも帰り道に通っている通りを発見し、毎日ひたすら2、3秒の間だけ彼女を見守っているというわけだ（決してストーカーではない！……つまり）。

あの雨の日に、彼女がなぜ傘もささずにあんなところに突っ立っていたのかということは心の端っこに引っかかってはいたけど、様子から察するにきつと何か悲しいことでもあったのだろう。

例えば、失恋……とか？

だとしたら、彼女は今フリーということになる。

そして、その時期に彼女と出会ったことは、まさに……運命だ！

そう！　神様が俺にあの娘と付き合いなさいと言って、優しく微笑んでいるのだ！　そうとしか思えない！　などと思い

つつ、出会いからこつち声すらかけられず未だに彼女の名前すら知ることができていない現状にはがみする日々が続いている今日この頃……。

なんとかして早く彼女とお近づきにならないと、いつ悪い虫が付くとも限らない。それに、あの天使のような綺麗な心と容姿を備えた女の子を、世の男ども（俺も含む）が放っておくわけがない！

早く手を打たなければならぬことぐらい分かってはいるのだが、こと恋愛に対して俺の控えめで、人見知りする性格はその本領を発

揮してしまう。このままでは、この恋も夢に描いた学生ライフと同じ道を辿ってしまうのは目に見えている。

どうする？　どうすればいい？　とりあえず、俺の存在を相手に知ってもらわなければ駄目だ。とりあえずは、そこからだ。そう。問題はどうかやって俺という人間をあの娘に気づかせるかなのだ。

散々悩んだ挙句、全くいい手段が思い浮かばなかった俺は、ある恐ろしい結論にたどり着いてしまった。どうやってあの娘と知り合いになるかはともかく、女の子のことは女の子に聞くのが一番ではないか。こともあるうに、俺はそう思い当たってしまったのだ。念のため断っておくが、俺にそんなことを相談できる女の子の友達なんていやしない。身近にいる女の子といえば、そう……春姉だけだ。しかし、春姉に相談したとしても結果は見えている。つか、それは自殺行為だ。あの自己中心的な人間が、俺の相談を真面目に聞いてくれるとは思えない。

「あんたが、恋？　マジで？　ちょっと待って。超ウケるんだけど」

とか言って笑われるに決まってる。いや、それだけならまだしも、最悪の場合俺の思いを寄せる彼女を　　して、俺を散々××××××××××俺の目の前で彼女に　　するという暴挙に及びかねない！……が、実際問題このままではどうしようもない。

まあ、要は俺が恋をしていることを知られずに、それとなく女の子の気持ちというものを聞き出せばいいだけのことだ。

あくまで、さりげなく。あくまで、自然に。あくまで　絶対ばれないように！

ホームドラマなら、ここは少々くさい感は否めずも、思わずふっと微笑んでしまうような姉弟の微笑ましいシーンになるはずだ。高視聴率ゲットすること請け合いだ。が、現実ドラマのように微笑えましくも、優しくも、甘くもない。

ちくしょう！　傍若無人な姉を相手に、微笑ましいシーンなんてできるか！　別の観点で高視聴率がゲットできても、その時には

俺の恋ははかなく散ってんだよ！　シャレになんねえだろうが！

「……………くそ。なんで姉弟間で素直に恋の相談もできないんだよ……………」
沈痛な思いを胸に宿したまま、その1時間後に

「ただいまー」

という春姉の声が玄関から響いてきた。俺は、ゴクリと唾を飲み込むと、深呼吸を数回繰り返してから覚悟を決めた。

第11話：初恋……！（その4）

春姉が帰って来て2時間後。ちょうど春姉が入浴を済まし、部屋に戻るのを見計らってから、俺は姉の部屋のドアをノックした。

それまでに充分モチベーションを高めていた俺だったが、ドアを開けると同時にそのモチベーションは、見事に打ち落とされることになった。開いたドアのわずかな隙間を縫って、謎の高速飛行物体が俺の顔面を直撃したのだ。

「ちよつとあんた！　なに勝手に部屋に入ろうとしてんのよ！」
頭の芯にまで届く衝撃にクラクラしている俺にお構いなく、春姉の怒鳴り声は俺の三半規管を激しく揺らした。俺は、床に落ちた謎の高速飛行物体に目を落としてから、ベッドにうつ伏せに転がって、俺をにらんでいる春姉に目をやった。

ああ……。つまり、一番手近にあった枕を俺の顔面めがけて投げつけたというわけか。だが、ちゃんと俺は部屋に入る前にノックはしている。

「ちゃんと……ノックしただろ」

俺はまだクラクラする頭を抑えながら、できるだけ不満が相手に伝わるようにしかめっ面を試みせた。すると、春姉は俺以上のしかめっ面で切り返してきた。

「あんたねえ、ノックの後に声ぐらいかけらんないの？　いくら姉弟だからって私は年頃の女の子なのよ。そうでなくても凶暴な弟をもって気苦労が耐えないってのに、こんなことでいちいち神経使わせられちゃたまないわ。っていうか、あんたこういうことに無頓着すぎんのよ。よく、女の子の気持ちぜんっぜん考えようとしないうつしいバカ男がいるけど、あんたはその典型ね。一回死んでみたら？」

「……」

まさに、その女の子の気持ち、というやつを知るためにここに立つ

ているのだが、やはり俺は大きな間違いを犯そうとしているのかもしれない。少なくとも、俺が知りたい女の子の気持ちというものは、容赦なく弟の顔面に枕を投げつけたり、平気で死ぬことをお勧めしてくるような女の子のものは、180度違うのだ。

「なに、その目。なんか言いたそうね」

無意識のうちに、俺は春姉をじっとにらんでいたらしい。俺は慌てて「別に」

と言って目を逸らしてから、足下に転がった枕を拾って春姉に放った。春姉は身を起こして枕を受け取ると

「で？」と面倒くさそうに声を出した。

「なんの用？ あんたが私の部屋に来るなんて珍しいわね」

ああ。まだこっちに引越してくる前、あんたの失恋のヤケ酒に無理矢理付き合わされた挙げ句、高速上段回し蹴りを側頭部に見事にキメられて天国の階段を昇りかけた時以来だよ。もつとも、酔っぱらってたあんたの記憶には、カケラもそのことは残ってないだろうから、よけい珍しく感じるだろうね。などと思いつつ、俺は早速話を切りだした。

「ちよつと、相談したいことがあるんだ」

「なによ。金だったら貸さないわよ」

この金の亡者め……。

「そんなんじゃないよ」

「じゃあ、なんなのよ。どうでもいいけど手短かにしてよね。私も暇じゃないんだから」

ベッドの上で開かれているファッション雑誌。その横に転がっている食べかけのスナック菓子の袋。テレビから漏れてくるバラエティ番組の派手な笑い声。

もし、お笑い芸人のツッコミ担当ならば

「アホ！ どっから見ても暇やろが！」

などと関西弁を用いて躊躇なく頭をひっぱたく場面だろうが、もちろん俺がそんな行為に及ぶことはない。受け取るために命を取ら

れるなんて、真つ平ごめんだ。

とりあえず座りなさいよ、との春姉の言葉に促されて、俺は花柄のリースのテーブルクロスがかけられた背の小さな丸テーブルの前に腰を下ろした。その凶暴性とはかくとして、春姉も一応は女の子なのだ。部屋はある程度綺麗に掃除されているし、部屋の中に置かれているものの多くも

「かわいい女の子」

をイメージさせるものばかりだ。まあ、これで部屋の中まで男勝りなら、正真正銘、男の出来上がりだ。

「で？ 相談って？」

そう言つて、春姉はベッドの上で胡座をかいた。

「ああ……」

「なによ。ずいぶん深刻そうじゃないの」

そう思うなら、うかれた顔するのはやめてくれ。つてか、その元凶は他ならぬあんただ。

「なに遠慮してんのよ、水くさい。一応姉弟なんだから、お金以外のことならなんでも相談に乗ってあげるわよ」

正直、その優しさは見当外れだが、ここまで来た以上もう引き返すこともできない。俺は決死の覚悟を決めて春姉に目を向けた。

「と、友達に相談されたことなんだけど、正直、俺にはよく分からないことなんだ」

「へえ！ あんた友達できたの？」

「え？ あ、ああ……」

「ふうん。よかったじゃん。にしても、世の中には物好きな人間もいるのねえ。今だから言っけど、実は私あんたには一生友達できないと思ってたのよ」

「……余計なお世話だ」

そういうことは思つても口に出すんじゃないねえ。

「で？ その友達にないを相談されたつて？」

「ああ……。実はそいつ好きな女の子がいてさ」

「へえ」

春姉の目に、好奇心というたちの悪い光が宿り出す。俺は背筋に冷たい汗を滴らせながらも、それを気取られないように努めて冷静に先を続けた。

「正確には、最近好きになったってことらしい。相手は他の学校の子（多分）で、そのことは知らないらしい。同じ学校じゃない以上接点もあまりないし、どうすればいいのかって。正直、そういう話、俺苦手だから」

「なるほど？　それで、そのあんたの友達はどうしたいって言うてんの？」

「どうしたいって　それは、まあ……とりあえず、相手に自分の存在を知ってもらうところから　」

「なに弱気なこと言ってるんだよ。そんなんじゃ他の男にその娘取られちゃうわよ」

「……じゃ、じゃあ、どうしろってんだよ」

「そんなの決まってるでしょ。告白よ。こ・く・は・く」

「な！　なに、突拍子のないこと言ってるんだ！　それじゃ、俺がここに来た意味ないだろが！」

「ばーか。なに本気にしてるのよ。知らない男にいきなり告白なんかされたって気持ち悪いだけだつての。冗談よ。じょ・う・だ・ん」

こ、こいつ……！

「ほんつと、あんたって分かりやすい性格してるわね」

「……」

「で？　あんたはどうしたいんだっけ？」

「だ、だから……！　とりあえず俺の存在をその娘に　」そこまで言つて、俺ははっとして言葉を止めた。

ちよ、ちよつと待て……。

あんたは、どうしたい？　俺の……存在？

恐る恐る春姉の顔をのぞくと、春姉はその愛らしい顔に不気味な薄ら笑いを浮かべて、俺を見下ろしていた。そこから感じ取れるのは、

もはや悪意以外のなにものでもなく、間違いなくそれは俺の恋の行方を暗示している。

かつてない恐怖と焦燥感に、俺の意識は一瞬どこか別の世界にジャンプした。

と、とにかく……！　ごまかすしかねえ！

「あれー？　どうしたの、隼人君？　俺の存在をその娘にどうしたいのかな？」

「な、なんのことだ？」

「なんのことって、あんたが恋しちゃってる女の子のことよ」

「ち、違う！　それは俺の友達だっつってんだろ！」

「ばーか。自分から墓穴ほつといて、今更ごまかすんじゃないわよ。大体、あんたに友達なんてできるわけないでしょ。こっちはハナからそんなホラ話信じちゃいないのよ。ってか、その手の嘘ってついて虚しくない？」

「ぐ……」

こっちだって、好きでこんな嘘ついてたわけじゃねえ！　などと噛みつくこともできず、俺は弱々しく春姉からそつと目を逸らした。

まさか、こうもあつさり嘘を見抜かれてしまうとは思ってもみなかった。こうなってしまう事態も充分考えられたはずなのに……！　どうやら、俺の考えは相当に甘かったらしい。あの何でもなさそうな冗談も、俺を興奮させて気を散らす為の伏線だったのか？　ちくしょう！　なにが

「冗談よ。じょ・う・だ・ん」

だ！　素知らぬ顔して、とんでもねえ罠しかけやがって！　春姉が俺の相談に素直に乗ってくれる、と申し出ている時点でおかしいと気づくべきだった。いや、この部屋を訪れること自体がそもその過ちだったのだ。　絶望感に打ちひしがれていると、やがて「ちよつと」

と春姉の声が俺の耳に入り込んできた。俺は絶望感に苛まれながらも、なんとか、絶望のふちから顔を上げて春姉に目を向けた。

「あんだ、なに勝手に一人で落ちこんでんのよ」

「……」

「なによ、その顔。言っとくけど、私はあんだが相談したいことがあるなんて言いながら、嘘ついてたのが気に入らなかっただけよ。

別に、あんだの好きな娘見つけたそうとか、その後あんだの気持ち本人に暴露してやろうとか思っっちゃいないわよ。まあ、あんだがボロ口出さずに最後まで嘘通してたら、そうしてやるつもりだったけど」

「ふ、ふざけんな！」

「あら、真剣よ私は。まあ、あんだが私に嘘つこうなんて100年早いってことよ。ってかさ、いいじゃん別に。好きな娘の1人や2人知られたからって、どってことないでしょ？」

それは、俺だからということか？ どうせ俺だからというわけか？ ふざけんじゃねえ！ 俺にだって、好きな娘がいて誰かに相談したいけど、恥ずかしいから

「実は友達に好きな娘がいてさ」

なんて、かわいい嘘をつく権利はあるんだよ！ ってか、それが嘘だと分かっても気づかない振りして弟の相談に乗ってやるのが姉としての務めだろうが！ などという俺の悲痛な心の叫びは、もちろんこの自己中心女に届くわけもなかった。

「さて、隼人君。姉さん、恋する君にお願いがあるの。聞いてくれる？」

につこりと笑う春姉の笑顔を前に、俺は心の底から思った。やっぱ、来なけりゃよかった……。

第12話：特殊能力解禁！（その1）

結局、春姉は当初の俺の相談など無視して、自分の頼みごと（もと
い命令）を済ますと、さつさと俺を部屋から締め出した。

「ち、ちよつと待てよ。まだ、話は終わってないだろ」

春姉の頼みごと（金儲け）を半ば強制的に引き受けさせられた後

「じゃあ、そういうことだから、分かったらさつさと出てつてよ」

と思いやりのカケラもない言葉を浴びせられながらも、俺はそう言
つてできうる限りの抵抗を試みたのだ。だが、それも徒労に終わる
こととなった。

「話つて？」

「いや、だから、今相談したことだよ」

「ああ。じゃあ……告白でもすれば？」

「……」

お前、さつき知らない男にいきなり告白なんかされたって気持ち悪
いだけ、つて言ったよな。とは思いながらも、すでにベッドに寝転
んでファッション雑誌の続きを読みだした春姉を見ると、文句を言
う気にもなれず、俺は無言で春姉の部屋を後にした。そうして、俺
は知られたくないことは知られ、しりたいことは知れず、拳げ句の
果てには理不尽な頼みごと（もとい命令）を押しつけられるという
おまけ付きで、無事（変に興味を持たれるよりはマシという意味）
自分の部屋にたどり着いたのだった。

こんな扱いを受ければ、血気盛んな世の15歳男子はみんな

「ふざけんじゃねえ！　こらあ！」

とぶちキれることだろう。姉弟の切実な恋の相談に

「じゃあ　すれば？」

といういい加減なつなぎを用い、拳げ句の果てには冗談だと言いつ
つたことをそのまま答えに引用してくるような相手だ。

誰だって、怒る。

怒るに決まっている。

だが、散々理不尽な扱いを受け、その度にぶちキレるほどの破壊衝動を抑え続けてきた俺の理性は、打たれ続けるうちに知らず知らずじよじよに耐久力をつけ続けていたのだ。数年も休まるときも与えてもらえず、強制的に鍛え続けられたそれは、今や向かうところ敵なしのキャパシティを誇るまでに成長を遂げており、もはや今の俺が姉の理不尽な扱いに

「ふざけんな！　こらあ！」

とぶちキレるようなことはまずありえない。

ぶちキレて返り討ちにあうか。理不尽な扱いに順応するか。悲しいかな。俺の中の防衛本能は、前者を選ぶことを許してはくれなかった。

「はあ……」

この先、当分はこのネタで身勝手な頼みごとを押しつけられるだろうことを思うと、暗闇のどん底につき落とされたような気分になってしまう。まあ、部屋の明かりを消しているので、今は本当に暗闇の中にいるには違いはないのだが。

ドアを閉めて完全に暗闇に包まれた中で、俺はパイプベッドの上に身を投げた。春姉の頼みごととは、俺のある特殊能力をえさにして金儲けに利用することだ。それは、言い換えれば、えさにすれば金儲けに利用できるということ、春姉にとって大事なのはそこだけなのだろう。現に、あの女俺の特殊能力を少しも信じちゃいないのだ（その時点でもう詐欺だ）。

俺は小さなため息をついて、せめてこのときだけでも全てを忘れ去ってしまおうと、そっと目を閉じた。視界が完全に閉ざされ、意識が暗闇の中にとけ込んでいく　と、すぐに俺はその気配を感じ取って、反射的に身を起こした。

皮膚の表面から、じわじわと染み込んでくるような異様な寒気。空気がよどんででもいるような、不自然な息苦しさ。そして、この気配。

俺は慌ててベッドから離れて部屋の明かりをつけた。瞬間的に感じた嫌な予感と直感は、やはり間違いではなかったらしい。

　どうやら、せめてこの時だけでも、なんてつつましい望みさえ俺には許されないようだ。

俺は視界の中心に

「それ」

を捉えつつ、またため息をついた。

第13話：特殊能力解禁！（その2）

霊を感じることができるようになったのは、いつからだったろう。見えるようになったのは、しゃべれるようになったのは、触れられるようになったのは、いつからだったろう。

正確な覚えがないということは、多分、物心がつく前からそうだったのだろう。もっとも、幼かった俺の不可解な言動を両親や春姉はただかまってほしただけの言動に過ぎない程度にしかとらえなかった。俺自身、それが特別なことだとは理解していなかったし、おかしいと自覚しだした頃には、もうそれなりの分別をわきまえるくらいには成長を遂げていた。

「おい、聞いてくれよ。俺って幽霊と話できんだぜ。すっげーだろ！」

なんて浮かれるほど脳天気でもなかったし、ましてや、この特殊能力をまともに他人が信じてくれると思えるほど、俺は馬鹿じゃなかった。つまるところ、俺に残された道は人知れず霊の存在に苦労する、ということだけだった。

パイプベッドの脇に立っている少女に、俺は目を留めた。

見たところ、まだ7、8歳ぐらいだろう。肩まで伸ばして整えられた髪。眉の少し上で切りそろえられた前髪のすぐ下には、子供らしい、丸くて大きな瞳がパツチリと開かれている。そして、無表情ながらも、どこことなく愛嬌を感じさせるぷっくりと膨れた鼻。

どこにでもいそうな、何の変哲もない少女だ。そう……両足がない

こと以外は。少女は一向にしゃべろうとする気配を見せず、俺をただじっと見上げていた。このままずっと見合っているわけにもいかず、俺は仕方なく先に声をかけてやった。

「俺になんか用か？」

「やつぱり……お兄ちゃん……あたしが見えるんだ……」

「ああ。でも、俺に憑いてもなんもしてやれねーぞ」

「お花……」

「……」

「お花……ママが……くれた……」

よせ。そんな哀願するような目で俺を見るんじゃないやねえ……。

「お兄ちゃん……」

俺は今、それどころじゃねえんだよ！

「お花……」

「……」

「お兄ちゃ」

「」

「だああ！ 分かった！ 分かったよ！ 分かったからそんな目で俺をみるんじゃないやねえよ！」

な目で俺をみるんじゃないやねえよ！

「要するに、その不良たちを追い払えばいいんだな」

少女から大方の事情を聞き終えた俺は、そう言っただけで少女に確認をとった。少女は、大きな目を数度しばたかせてから、安心したようににっこり笑うと

「うん……」

と肯いた。

「で？ お前、いつ俺に憑いた？」

「今日……。学校から帰るお兄ちゃん、見かけた時……」

「……おかしいな。今の今までそんな気配はなかったけどな」

「それは、あたしがばれないようにしてたから……」

「ばれないようにしてた？ なんてだよ」

「だって、お願い聞いてくれるかどうか不安だったから……」

「……」

「でも、さっきお姉ちゃんにひどいこと言われてるのに、文句一つ言わないお兄ちゃん見てたら、大丈夫かなって……」

言わないんじゃないよ。言えないんだよ……。

俺はパイプベッドの上に寝転んで大仰にため息をついた。

この少女は、この近所で交通事故に遭い亡くなった霊らしい。

俺がこの町に引越してきたばかりの頃、散歩の途中で珍獣スキンヘッドたちに訳の分からない因縁をふっかけられた、二度と思い出したくもない場所。その少し先の交差点で事故に遭い亡くなった子供というのが、どうやらこの少女らしいのだ。

一度、珍獣スキンヘッドたちを追い払いはしたのだが（ただの成り行きだが）、どうやら、この町には死者への供え物でサッカーをする単細胞がまだ他にもいるらしい。そこで。

「お兄ちゃん……一度頭ツルツルのお兄ちゃん、やつつけてくれたでしょ……？ だから、お兄ちゃんなら力になってくれるかなって思ったの……」

というわけだ。

……幽霊からの頼みごとは、これで何度目だろうか。生きた人間よりも死んだ人間との会話の総数が圧倒的に勝っている俺って……。

とにかく、断りたいのはやまやまだが、一度憑かれるとこいつらは自分の頼みごとを聞いてくれるまで、しつこくまとわりついてくるのだ。よって、俺に許された選択肢は、こいつらに目を付けられた瞬間から一つしかない。

「追い払うのはいいけどよ」

俺はそう言って、横目で少女を見た。

「お前にも、ちょっと働いてもらっぞ」

「え……」

「ま、心配すんな。殴るよりよっぽど効く方法があんだよ」

「なに……それ……？」

「それより、不良たちの出没時間とか分かるか？」

「うん……夕方の5時から6時の間ぐらい……」

「そうか。じゃあ、明日それぐらいの時間に行ってやる。だから、今日はもう帰れよ」

「……うん」

少女は小さく肯くと、俺の部屋を出ていこうとした。俺は、少女の姿が完全に部屋をすり抜ける前に

「ちょっと、待て！」

と声をかけた。

「……？」

不思議そうな顔をして、少女が俺の前に立つ。俺は言おうかどうか迷いながらも、結局はそれを口にした。

「その……早く成仏しろよな。今度の奴ら追い払っても、ちよくちよく見に行つてやるからよ」

「……ありがとう。お兄ちゃん……」

もう死んでしまったとは思えない、気持ちのいい笑顔を残して、少女は俺の前から姿を消した。

俺はその笑顔がもうこの世にはないものだということが信じられなくて、少しの間、少女のいた虚空に目を留めた。

いくら目を凝らしても、やはりそこに少女の笑顔が浮かぶことはない。

俺はやりきれない思いを持て余しながら、そこから目を逸らした。

第14話：特殊能力解禁！（その3）

翌日、俺は少女との約束を果たすため、学校が終わってから（といっても、屋上で寝ているだけだが）すぐに例の場所に向かうはずだった。だが、グラウンドから響いてくる運動部員たちの濁り一つないかけ声や声援の端っこに、濁りきった怒声が含まれていること感じ取った俺は、校門をくぐろうとしていた歩を止めて、その怒声のした場所へ足を向けた。

「ごるあ！」

その濁りきった怒声、もとい、新種の珍獣のような鳴き声と人気のない校舎裏を結びつければ、そこでなにが行われているのかは見るまでもないだろう。

俺は複数の怒鳴り声がする校舎裏にたどり着くと、校舎の陰に身を隠して怒鳴り声の元を覗き見た。

「ごるあ！ てめえ、かかってこいよお！」

「だめだよ、ちー君。こいつにそんな根性ないって」

「はは。そうそう」

やはり、珍獣スキンヘッドとその連れ2人が、1人の男子生徒を囲んで楽しそうに暴行を加えていた。ちょうど、珍獣スキンヘッドたちの影になって男子生徒の顔は見えなかったが、おそらくその男子生徒は喧嘩などとは縁遠い、善良な生徒なのだろう。男子生徒はなす術もなく地面にうずくまって、体を丸めたまま不良3人に足蹴にされ続けていた。

「ごるあ！ てめえ、昨日言っという金はもってきてんだろっうな！」

一通り男子生徒を痛めつけ終わると、珍獣スキンヘッドは男子生徒のズボンのポケットから財布をひたたくって、中身を取り出した。

「うおお！ 見るよこれ！ マジで10万入ってやんの！」

「うっそ！ マジで！」

「一気に大金持ちですかー！」

……おいおい。１０万はちょっとやりすぎだろ。とる方もとる方だが、持つてくる方もどうかしている。と思っていると、馬鹿面をして浮かれた珍獣スキンヘッドは、その面に見合った馬鹿な台詞を吐き出していた。

「おい、ごるあ！　てめえ、次は１００万持つてこいよお！」

「ちよつと、ちー君。そりゃいくらなんでも無理じゃない？」

「そうそう。９９万にまけてやったら？」

「じゃ、１万まけてやつか？　おい、よかったなあ？　だはははは！」

珍獣スキンヘッドは、馬鹿笑いしながら男子生徒の頭を蹴ると

「おっし！　じゃあ、ゲーセンでも行こうぜえ！　こんだけありゃ一生遊べるぜえ！」

などと、アホなことを言いながら１０万円の札束を自分のズボンのポケットに押し込んだ。男子生徒は四つん這いに身を起こすと、悔しそくに歯を食いしばって珍獣スキンヘッドたちの後ろ姿をにらんでいた。だが、珍獣スキンヘッドたちの姿が見えなくなると、男子生徒は力なく顔を伏せた。

「……」

珍獣スキンヘッドたちのはしやぎ声が、だんだん遠ざかっていく。

俺はその声が完全に途絶えてから、まだ四つん這いの格好のまま顔を伏せている男子生徒の前に立った。

「あ……き、金常時……君……」

男子生徒は顔だけ上げて俺を見ると、弱々しく俺の名前を呟いた。

「……大丈夫か」

「う、うん……」

俺はまだ四つん這いになったままにいる男子生徒に手を差し伸べてやった。男子生徒はきよとした顔で、差し出された手と俺の顔を交互に見てから、おどおどと俺の手を握った。

「あ、ありがとう」

男子生徒が礼を言いきる前に、俺は握られた手を荒々しく振り払った。男子生徒が、突然のことに大きくバランスを崩して、その場にしりもちをつく。

「情けねえな、お前」

「え……」

「黙って耐えてりゃ、そのうち誰かが助けてくれるとも思っ
てんのか」

「……」

「少なくとも、俺はお前みてえな情けねえ奴は助けねえ」

「き、金常時君には……分からないよ……」

「あ？」

「君みたいな強い人間には分からないんだよ！　僕みたいな弱い奴は、一生誰かにいびられて……こづかれて……そうやって……そうやって生きていくしかないんだよお！」

男子生徒の目からは、ポロポロと涙がこぼれ落ちていた。俺は、しばらく男子生徒を見下ろしてから、小さくため息をついた。

「……じゃあ、ついてこいよ」

「え……」

「お前にいいもん見せてやるよ」

第15話：特殊能力解禁！（その4）

「ね、ねえ、金常時君……。ついてこいって、いったいどこに行く気なの？」

「いいから、来いよ」

「で、でも……。こっちは僕の家とは逆方向なんだ。困るよ、僕……。今日、塾があるんだ」

「いいから、黙ってついてこい」

ひと睨みしてやると、男子生徒、もとい、坂本は

「ひ」

と短い悲鳴をあげて、文句を言うのをぴたりとやめた。

坂本の怯えた表情は、どう見ても今にもとって食われることを懸念しているようにしか見えない。

そして、もちろん坂本からすればその恐怖の対象は少し前を歩いている俺で、少しもそんな気のない俺が不機嫌になるのは仕方のないことで、不機嫌な顔をした俺を見て坂本がさらに怯えるのは仕方のないことで。

とまあ、そんな具合に俺と坂本はさつきから悪循環の無限ループにハマりこんでいた。そこから抜け出すには、坂本が、俺が決して傍若無人な人間ではないことに気づくか、俺が坂本に微笑みかけてやるかのどちらかしが方法がないのだが、つい10分ほど前に初めて言葉を交わした他人同士の俺たちには、まあ、それは到底無理な話だった。

大体にして、坂本は俺のことを知っているようだったが、俺は坂本のことを不良に絡まれるために存在している人間、としか認識していなかったのだ。

その人間に坂本圭という名前が付いていて、おまけに俺のクラスメイトだったことも、ついさつき本人に聞くまでまるで知らなかった。そんなわけで、とりあえず目的地に着くまでは俺も坂本も、この無

限ループの中をさまよい続ける他なかった。目的の場所は、俺の家の途中にある通りだった。そこに着いた頃には、ちょうど日が暮れかかり、少女の言っていたとおり、通りの一角には柄の悪い見たところ高校生らしい集団が、すでにたむろしていた。

「き、きき、き、金常時君……？」

坂本は、理解しがたい奇抜なファッションをした集団を見て、後ろから俺に恐る恐る声をかけてきた。

「も、もしかして、あの人たち……き、金常時君の……お、お友達？」

どういう意味だ、そりゃ。

無言で坂本に目をやると、坂本は

「ひい」

と短い悲鳴をあげて、俺から逃げようとした。

「お、おい！」

慌てて坂本の襟首を背後からつかむ。坂本は、手足をじたばたさせながら見苦しい悲鳴をあげた。

「う、うわああー！ た、助けてよお！ あ、あんな大勢に

囲まれたら、ぼ、僕死んじゃうよお！」

「待てよ！ なに勘違いしてんだよ、お前！」

「うわああああー！ お願いだよお！ 助けてよお！」

「おい、坂本！」

「うわわああああー！」

「おい！」

「ああああああー！」

だめだ、こりゃ……。

自分が集団リンチされると勘違いした坂本には、もはやなにを言っても無駄だった。坂本はこの場から逃げようと、一心不乱に手足をばたつかせながら、間抜けなダンスを踊り続けた。

間抜けなダンスと悲鳴に興味を示した不良集団が、馬鹿笑いととも

にこちらに近づいてくる。どうやら、本当にこいつは不良に絡まれ

るために存在する人間らしい。俺は一心不乱に間抜けダンスを踊る坂本の背中に同情のまなざしを向けた。

「ねえねえ、なにしてんの？」

いやらしい薄ら笑いを浮かべて、リーダー格らしい男が先頭に立って俺に話しかけてきた。

これでもかというほどおっ立てられた金髪の髪。剃り込まれてなくなった眉毛に、鼻ピアス。なるほど。確かにこいつが一番頭悪そうだ。

「なになに、こいつら」

「あつ君の知り合い？」

リーダー格の鶏男（面倒くさいので）の後ろから、似たような人間が5人近づいてくる。坂本はまだ間抜けなダンスを踊っていた。

「おい。いい加減落ち着け」

いい加減、坂本のダンスを支えるのに疲れた俺は、坂本の襟首から手を離れた。

「うわあ！」

バランスを崩した坂本が、派手に地面に転がった。それを見て、不良たちは一斉に笑い出す。

「き、ききき、金常時君……」

不良集団に囲まれている状況にようやく気づいた坂本は、地面にへたり込んだまま泣きそうな顔を俺に向けた。

「いいから、お前はそこで見てろよ」

「み、みみ、見てろって……」「お取り込み中、申し訳ありません」

そう言つて、鶏男は俺の肩に手を置いた。

「さしつかえなければ、君たちの財布の中身見せてもらえませんか？」

「ってか、さしつかえあつても見せてくださーい」

耳障りな笑い声が重なって響きあう。俺はため息をついて、不良集団と向き合った。

「質問1」

「あ？」

「その交差点で事故に遭って亡くなった女の子のこと、お前等知ってるか？」

「はあ？ なにそれ」

「質問2 あったはずのその女の子のための供え物の花瓶と花が、どこにも見当たらないのはどうしてだ？」

鶏男は仲間と顔を見合わせてから、吹き出して言った。

「さあ？ 誰かが持ってたとか？ お前、知ってる？」

「知らない。あ、でも昨日まではあった気がするね」

「そうそう。通行の妨げになるから、俺たちが責任もって処分したような、しないような」

「質問3」

「おつと。もう次行くの？」

「お前等、幽霊見たことあるか？」

俺の言葉と同時に、冷たい風が辺りを吹き抜けた。それを合図にしたように、空気が小刻みに振動してじわじわと肌にまとわりつく。

不良たちは異変に気付いて、5人一斉に後ろを振り返った。

なにもない空間に、ゆっくりと少女の姿が浮かび上がる。不良たちの目が一様に少女の足元に注がれて、また少女の顔をなぞる。事故に遭った当時の姿を再現した少女の姿は、そこら辺のホラー映画に出てくる妖怪などよりよほど迫力があつた。

「かえして……」

うつむいていた少女の顔が、ゆっくりと上がる。

「お花……かえして……」

「う、うわあああああああああ！」

たちまち、不良たちは恐怖に我を忘れ、我先にとこの場から逃げ出していった。まあ、これでもう奴らがこの場所に近づくことは二度とないだろう。俺は遠くからまだ聞こえてくる不良たちの雄叫びに苦笑しながら、少女に目を向けた。

「悪かったな。こんな使い方してよ」

「ううん……」

「あの花の代わり……は、いらねえか」

「お兄ちゃん……」

「もう逝けよ。今度は迷子になんじゃねーぞ」

「……うん」

少女は小さく肯くと、静かに目を閉じた。

「お兄ちゃん……」

「いいよ。言わなくても、霊（お前等）の気持ちは全部伝わってくる。そういう体質してんだ」

「じゃあ……きつと、だよ……」

「ああ」少女の笑顔がゆつくりと薄らいで、やがて、それはもうこの世界から完全に消えていった。

「当たり前だろ。馬鹿……」

俺は少女のいなくなった虚空に、そつと呟いた。

寂しさしか伝わってこなかった。ただ、それが少女のすべてだった。だから、余計寂しかった。

悲しみと寂しさの狭間にあるのが涙なら、涙に流せなかった感情はどこに流せばいいのだろう。ただ、とめどなく溢れる寂しさは、どこに流せばいいのだろう。

流せなかった寂しさは、気付いてもらえなかった寂しさは、いつか誰かが拾ってくれますか？　でも、もしそうだとしても、これだけは分かってほしい。

私は、ただぎゅっと手を握ってほしかったただだってこと。私はただ、ぎゅっと抱きしめてほしかったただだってこと。私はただ、あなたを求めていただけだってこと。

お母さん。この寂しさを拾って欲しい人があなただけだったってこと。

ただ、それだけは分かって欲しい　。

冷たい風が流れた。ただ、冷たいと感じたのは、この風のせいじゃない。きっとそれは、少女の気持ちに触れたせいだ　。

「き、きき、金常時君……？　い、今のって　？」

腰を抜かした坂本が、情けない声を出しながら俺を見上げた。

「昔から、俺は霊の存在を感じることができたよ。見ることもできるし、話すこともできる。その気になれば、さっきみたいに他人に見せることもな」

「へ、へ……？」

「今のガキは、交通事故に遭って死んじゃった幽霊だ」

「き、金常時君？」

「いいから、黙って聞いてろよ」

俺の言葉に、坂本は力なくうなだれた。

「初めからそうだったわけじゃない。多分、俺の成長と一緒に勝手に俺の特殊能力も成長したただけの話だ。ある日突然、相手が霊なら意思とは関係なくそいつ等の気持ちを感じることができるようになった。そいつの思い出とか、記憶とか、考えてることとか、全部だ。迷惑な話だぜ」

「……」

「さっきのガキは、母親に虐待されてたつてよ」

俺はそう言って

「はは」

と笑った。

「父親はいない。母親は酒乱。あいつの記憶の中には、痛いのと辛いのと寂しいのしかねえ。

あいつが母親のことママって呼ぶと、母親は不機嫌になってあいつをぶった。

外に出るとき手をつなごうとしても、面倒くさそうに振り払われた。話しかけても、無視された。でも、ある日突然、母親が話しか

けてくれた。眠つてるところを叩き起こされたことも、部屋の中がまだ真っ暗で少し怖かったことも、母親の息が酒臭かったことも、そのときはどうでもよかった。ただ、母親が自分に話しかけてくれたことが、なにより嬉しかったんだ。

あいつは母親の言いつけ通りに、500円玉一枚握りしめて酒を買いに外に出た。外は真っ暗だ。いつも見てるはずの景色が全然違って見えて、まるで別世界の中に放り出されたみたいだった。怖くなるぐらい不安でよ、すぐ家に戻りたくなった。けど、あいつはどうしても母親の役に立ちたかった。だから、すぐむ足を無理矢理引きずって、前に進んだ。

母親は近所のコンビニまでだからどうってことない程度に思ってたんだろ。

ただ、あいつはコンビニで酒が買えることなんて知らなかった。自販機で済ませられるなんてことも知らなかった。どうすればいいのかわからない。でも、どうしても母親の役に立ちたかった。散々、暗闇の中を歩き回った。気がついたら、自分がどこをどう歩いているのかも分からない。その時、道路を挟んだ向こう側に母親がいるのを見つけた。

道路を挟んだ向こう側にはちっぽけなスーパーがあった。もう閉まって明かりなんてついてなかったけど、その店の前に置かれた自販機の明かりの中に見つけた人間が、あいつには母親に見えたんだ。その時、今までずっと我慢してた感情が溢れだした。どうしようもなく不安で、どうしようもなく寂しかった。

気が付いたら、泣きながら、ママって叫んでた。あいつは何度もママって叫びながら、道路の向こう側にいる母親の元へ駆けだした。

けど、あいつは母親には触れられなかった」

「き、金常時君……」

「あいつが死ぬ前に泣きながら叫んだ言葉は、多分、そこにいた人間から母親に伝えられたんだろ。事故後に供えられた花は、あいつの母親からのものだ。だから、俺に代わりの花なんて用意できねえ

んだ」

「……」

「花を供えにきた母親がなにを思ってたのかは分からねえ。あれから、もう一度もここに来ないのは、あいつに愛情をかけてやれなかった後悔からか？　それとも、自分の娘を死なせちまった罪悪感からか？　あいつにも、俺にも、本当のところがどうなのかなんて分かんねえんだ。ただ、分かっているのはあいつの母親がその時、泣いてたってことだけだ」

俺は少女が最後に残した思いを手繰り寄せた。

あのね、お兄ちゃん……。

（私の代わりに、ママにごめんなさいって……伝えてくれる……？）

「それが、あいつが最後に望んだことだ。　馬鹿なガキだろ？

最後なんだ。最後ぐらい、文句の一つでも吐いてりゃ俺がちゃんと伝えてやったのによ」

俺は最後に見た少女の笑顔を思った。

ゆっくりと薄らいでいくその笑顔が、やがて消えてしまうその刹那に見た少女の夢は、母親が花を供えながら泣いてくれている姿だった。

ねえ、お兄ちゃん……。ママ、私のために泣いてくれたのかな……。今度は私のこと……。抱きしめて……。くれる……。かな……。

なにをされても泣かないガキだった。虐待されても、つなごうとした手を振り払われても、無視されても 寂しさがどんなに溢れてきても、あいつは泣かなかった。

そんなあいつが最後に見せた涙は、ちゃんと母親の元に届いただろうか。

あいつが流せなかった寂しさを、母親は拾ってやったのだろうか。逝くその瞬間にあいつが見た夢が紛れもない真実のなら、その真実の中であいつが最後に望んだことも真実だったと信じたい。それが刹那に過ぎなかったとしても、それはあいつのすべてだったから。あいつの想いは、確かにここにあったから。

第16話：弟子入り志願！（その1）

沈みかけた夕日の名残がアスファルトを照らして、そこに立つ俺としゃがみ込んだ坂本の影を映しだしていた。

言葉もなく立ち尽くし、遠くを見つめる俺。その俺の足下にしゃがみこみ、うなだれる坂本。そして、夕日を背にしたこのシチュエーション。

まさに、青春の1ページといった様相だ。ここで、俺が坂本の肩にそつと手を置いて

「泣くなよ、坂本（泣いてないが）」

なんて優しい言葉をかけてやれば、坂本は

「金常時君！」

なんて言つて、俺に泣きながら抱きついてきそうだ。

俺は、うなだれた坂本の肩に手を置くわけもなく、なにもせず言葉だけを投げかけた。

「お前、言つてたよな。自分は誰かにいびられて生きていくしかないつてよ」

坂本は、ゆつくりと顔を上げて俺を見上げた。

「あのガキは、もうどんなに望んでも、自分で母親に想いを伝えることはできねえ。でも、お前はそんなあいつとは違うだろ。お前も俺も、生きてんだからよ」

「き、金常時君……」

「お前だつて、ほんとは変わりたいって思つてんだろ。違うか？」
「……」

「だったら、自分はこうだなんて決めつけんなよ。望むことができるだけ、俺たちは幸せ者なんだからよ」

なんて言いながらも、この冷たすぎる現実を嫌というほど味わい、変わることもできずにいる自分のことを思うと、なにもできない坂本の気持ちは手に取るように分かってしまう。

それがどんなに難しいことで、それがどんなに勇気があることなのか。でも、だからこそ、俺は坂本を放っておけなかったのだ。俺は、初めから坂本にじゃなく、自分自身にこの台詞を伝えたかったのかもしれない。

そんなことをぼんやりと考えていると、いつの間にか、目にウルウルと涙をためた坂本が俺のこを見つめていた。一方、ぼんやりとしているうちに、俺も坂本のことを見つめていたようだ。

見つめ合う俺と坂本。なんだ、この状況……。

俺は今にも抱きついてきそうな坂本に抱きつかれてしまう前に、そそくさと坂本に背を向けた。

「じ、じゃあな……」

「あ！ ま、待ってよ、金常時君！」

そう叫ぶと、坂本は後ろからいきなり俺の足にしがみついてきた。

「な！ なにやってんだよ、お前！ 放せ！」

無理やり引き離そうとしても、全体重をかけてしがみつかれた俺の足は、坂本を振り払うことはできなかった。

周りの通行人が、白い目を俺に向けて横を通り過ぎていく。いくら引きずっても、坂本は俺の足にしがみついて離れない。

「おい！ いい加減にしろ！ 恥ずかしいだろが！」

「ぼ、僕……！ 初めてなんだ！」

「はあ？」

「僕のことを見てくれる人……まして、なにかを言ってくれる人なんて……初めてなんだよお！」

坂本の目から涙がポロポロとこぼれ落ちる。が、この状況で優しく手を差し伸べてやるほど俺はできた人間ではない。いつの間にか、通行人はわざわざ足を止めて俺たちを傍観し始めているのだ。

「いいから放せ、馬鹿！」

「待ってよお！ 行かないでよお！」

じよじよに俺たちの周りに人だかりができてくる。俺はその気配に冷や汗を流しながら、なおも坂本を引きずり、坂本は坂本でなおも

俺の足に強くしがみついてくる。

ちくしょう。このままじゃ、また変な噂がたちまうじゃねえか！

「おい！ いい加減にしろ！ 俺にどうしろってんだよ！」

「ぼ、僕！ 初めてだったから！」

「だから、なんだよ！」

「だから！ だから、僕を弟子にしてよお！」

「はあ？ 弟子！」

「お願いだよお！」

弟子って……なに時代の人間だよ。ってか、だから、ってなんだよ。だから弟子にしてくれって。

その気にさせた責任取れとか、そういうことか？

「ふざけんじゃねえ！」

「真剣だよお！ 僕も金常時君みたいに強くなりたいんだよお！

強くなつて、クラスの人気者になりたいんだよお！」

お前、そこまで変わりたかったのか……。

この際、それは無理だとはつきり言ってやった方がこいつの為なのだろうが、今の俺にツツコミを入れる余裕などありはしなかった。

とにかく、俺と坂本を取り囲んだ壁から放たれる冷たい視線とひそ話の中から、一刻も早く抜け出してしまいたい。

俺は、涙ながらに訴えてくる坂本に、しょうがなく言ってやった。

「分かったよ！ 分かったから、さっさとその手を放せ！」

「じ、じゃあ、僕を弟子にしてくれる？」

「あ？ あ……ああ」

と答えなければ、こいつは一生この手を放さないだろう。

俺の返事を聞くと、坂本はようやく俺の足から手を放した。こいつの貧弱な体のどこにこんな力が宿っているのだろうか……。

俺は満足そうな笑顔をして立ち上がる坂本を見つつ、ため息をついた。

第17話：弟子入り志願！（その2）

とりあえず、今日は塾があるからと言って、一方的に弟子入りを済ませた坂本は、満足そうに來た道を引き返していった。その後ろ姿は、未来の自分を想像してか、ルンルンと鼻歌が聞こえてきそうなほど弾んでいた。

おそらく、坂本は喧嘩に強くなりさえすれば、人気者になれると思っっているのだろう。だが、それは大きな間違いだ。喧嘩が強い〃人気者、なんて図式が成り立つのなら、今頃俺は楽しい学生ライフを満喫しているはずなのだ。

つてか、氣付よ坂本。俺に弟子入りして喧嘩強くなったって（喧嘩の強い坂本など想像できないが）、意味もなく他人に恐れられる不幸な人間が生まれるだけだぞ。なんてことを心の中で呟きつつ、俺はその場を後にした。

「……でも、あんまり悪い気はしないんだよな」

とりあえず、これは友達ができた、ということでもいい……のか？

「……」

分かんねえ。分かんねえよ……。

翌日の昼休み、誰も寄りつかない屋上に入ってきた人間は、もって生まれた天性の暗いオーラにはそぐわない笑顔を俺に向けていた。

「あ、ありがとう！　ありがとう！　金常時君！」

「……いや。いいよ、別に」

俺の言葉が耳に入っていないらしく、坂本は何度もありがとう、ありがとうと連呼しながら、俺に感謝の気持ちをうざったくなるまで表していた。

まあ、簡潔に説明すれば、昨日坂本が珍獣スキンヘッドたちに巻き上げられていた10万円を昨日のうちに取り返してやり、たった今、それを坂本に返してやったというわけだ。

もつとも、5千円はすでに使われてしまっていたので、戻ってきたのは9万5千円なのだが、坂本は全然そんなことは気にしていないようだった。

とにかく、坂本にとって大事なのは奪われた金ではなく、俺が奪われた金を取り返してくれたという事実なわけで、その既成事実が作りあげるものは俺と坂本の美しき師弟関係なわけで……。分かってた。金を取り返してやれば、自ら墓穴を掘ることになることは……！でも　って、もう、説明するのもおっくうだ。ほっとけないもんはほっとけないんだから、しょうがないだろ……。

「ねえ、金常時君」

「あ？　な、なんだよ」

坂本は、満面の笑顔を俺に向けて声を出した。

「これから、金常時君のこと師匠って呼んでいい？」

「いいわけあるか、この馬鹿」

即答する俺に、坂本は

「ええ？」

と間抜けな声を出した。まるで、どうして断られるのか分からないみたいに。ってか、ほんとに分かってないな、こいつ……。

「ど、どうして？」

「……どうしてもだよ」

ああ……。ここまでくると、いちいち理由を説明する事自体が、なんかもうウザイ。

「だって、昨日僕を弟子にしてくるって言うてくれたじゃないか」

「お前、あの状況で交わされた約束が本当に実行されると思うなよ」

「そ、そんなあ！　ひどいよお！」

「……」

「じゃあ、昨日僕に言うてくれたことは全部嘘だったの！」

「……」

「このままじゃいけないって、教えてくれたのは師匠じゃないか！」

「師匠はよせ！」

シカトを決め込んでいたのに、あまりにもベタな坂本のボケ（本人はいたって真剣だが）に思わずツツコミを入れてしまう。坂本は俺の切れツツコミに

「そんなあ……」

と呟いて、しゅんとうなだれてしまった。

「……」

「……」

……だめだ。この、俺が一方的に悪いみたいな空気に耐えられねえ……。

俺はうなだれた坂本に、仕方なく声をかけた。

「　なあ、坂本。お前……俺が怖くねえのか？」

「え？」

坂本は短い声を出して顔を上げた。

「俺が周りから死神とか呼ばれてんの知ってんだろ？」

「う、うん」

「じゃあ……怖くねえのかよ」

「　確かに、こうやって金常時君と話す前までは、君のこと怖いって思ってたけど……。でも、今は君のこと」

俺は眼鏡の奥で優しく光る坂本の目を、まっすぐ見つめた。

坂

本。お前……。

「　頼りになる師匠だと思ってるよ」

「だから、師匠はよせつつってんだろ」

「そ、そんなあ！　お願いだよお！」

……結局、こんなオチかよ……。

俺は情けない声を出して哀願してくる坂本を見つつ、ため息をついた。

第18話：弟子入り志願！（その3）

「で、なんでお前は俺についてくんだよ」

俺はすぐ横をぴたりついて歩いてくる坂本に目を向けて、ため息まじりに呟いた。どうやら、終業のチャイムが鳴ると同時に坂本は俺より先回りして、校門の前で俺が来るのを待っていたらしい。下校する生徒が無数にひしめき合う中、いきなり「師匠！」なんてこいつに親しげに、かつ大声で声をかけられれば、誰だって気が滅入ってしまうだろう。

つてか、知り合いに声かけられてのに他人の振りして素通り、なんてベタなコントみたいな真似をまさか自分がやる羽目になるなんて思ってもみなかった……。

実際やつてみると、周りの目は無視された方じゃなくて無視した方に向けられるのだ。

え？ なに？

あいつあんな奴に親しげに声かけられてんぞ。

つてか師匠！ 師匠つてなんだよ！

的な目だ。そんな中

で「待つてよ！ 師匠！」なんて無邪気な台詞とともに後をついてこられては、もはや俺の下手な演技程度では、どうしようもないことは言うまでもないだろう……。

というわけで、俺のテンションはこれでもかというほど下がっていた。今坂本に投げかけた質問も遠回しの「ついてくんな」的なものだ。が、そこは下校者ひしめく校門の真ん中で「師匠！」なんてなんの恥ずかしげもなく叫ぶことができる坂本のこと。

「なんでつて、師匠のお供をするのは弟子として当然のことじゃないか」

とまあ、そんなわけで、俺のテンションは更に下降線をたどることとなった。

「お前、師匠はよせつて何度言ったら分かんだよ」

「そんなこと言っただって、僕もう君に弟子入り済ませちゃったし

「いや、勝手に都合よく済ませんな。ってか、承諾されてもないのになんで、迷いもなく弟子になりきってんだよ、お前は」

「そんな！　だって、あれだけお願いしたのに！」

「したのになんだ！　お願いに対する答えの決定権を持つてんのは、する側じゃなくてされる側だろが！　それ無視して勝手に決定権行使してんじゃねえ！」

「そ、そんなあ……」

坂本が、情けない声を出してがつくりと肩を落とす。その様子は確かに同情をせずにはいらなかったが、その肩に手を置いて、同情するなら弟子にしてくれ、と言われても困るので、俺はただ、足を止めてその場に立ち尽くす坂本を黙って見守った。

「き、金常時君……」

やがて、坂本はぶるぶると肩を震わせながら、かすれるような声で俺の名前を呟いた。

「　僕……僕……本気で変わりたいって思ってる。変わらなきゃって思ってるんだ……。だから　」

「だから、他人を頼るのか？　他人をあてにして、そいつの弟子になれば本当にお前変われんのか」

「……」

「俺には、どうしてもそんな風には思えねえ。少なくとも、誰かを師匠呼ばわりしてはしゃいでる奴が、なにかを成し遂げられるとは思えねえよ」

なにも言い返してこない、坂本。

よし。これで、もうこいつに師匠呼ばわりされないで済むだろ。

俺は無言でその場に立ち尽くす坂本に「じゃあな」とだけ言っそこから離れた。

悪いな、坂本……。俺に弟子入りしたとしても、お前の望む未来は100%叶わないんだよ（まあ、誰に弟子入りしたとしても結果

は同じであろうことはおいといて）。

坂本を置いて、俺は商店街を抜け、いつもの交差点の前で足を止めた。ポケットから携帯を取り出し、時間を確認する。

なんだかんだで、結局昨日は彼女を見ることができなかったのだ。今日こそはこの目にちゃんと彼女を焼き付けておかねば　というわけで、坂本。お前につきまとわれちゃこっちも困るんだよ。

「金常時くーん！」

つて、思ってるそばから……。

俺は背後から迫ってくる坂本の叫び声を聞いて、がっくりと肩を落とした。が、事態は

俺の予想（坂本にすがりつかれ、涙ながらに師匠を連呼される）を遙かに通り越し、さらに悲惨な展開へと突き進んでいた。

坂本の大声が背後から響いてきた次の瞬間、なんとこれ以上ない絶妙のタイミングで、彼女が交差点を通りがかってきたではないか！
「……………」

俺は声にならない声（うわおおおー！）をあげつつ、完全にフリーズしてしまった。

こ、こうなったらもう、彼女がこっちに興味を示すことなく無事通り過ぎてくれることを祈るしかない。俺は、瞬きをするのも忘れて、彼女の姿を見守った。

1秒でも長く視界の中に留まっていた欲しくもあり、1秒でも早くこの場を通り過ぎて欲しくもある。相反する思いに悶々と葛藤する俺に気付かずに、なんとか彼女は無事交差点を通り過ぎ　。

「金常時くーん！」

ることはなかった……。

彼女が順調に通りの真ん中までさしかかったところで、本日一番の坂本の大声が彼女の耳に届いてしまったのだ。彼女は坂本の大声にビクッと肩を震わせて、少し当惑気味に強ばらせた顔を俺に向けた。坂本ではなく、あくまで俺に。

彼女が足を止めて俺を見ている。もちろん、俺も見つめ返す（彼

女を見つめたままフリーズしているの。

見つめ合う俺と彼女。

こ、この状況は……ちょっと、いいかも。

「金常時くーん！」

って言うてる場合じゃなかった。

彼女の瞳に見とれる暇もなく、背後から坂本の声が迫ってくる。俺はヒートアップした危機感（つまり坂本と知り合いだとか思われたくない）に手を貸してもらい、なんとかフリーズを自力で解いた。がまあ、緊張のあまり俺の取れた行動と言えば、彼女からそつと目を逸らして、うつむくというかわいいものだけであり、現状は何の変化も見せることはなかった。

「き、金常時君……」

とかしてるうちに、追いつかれたし……。

ああ……。俺の人生今度こそ終わつたな……。ってか、なんだよこの間の悪さは。なんでいつも小走りですぐ通り過ぎちゃう彼女が、今日に限ってゆっくり歩いてんだよ。あれか？ 女の子1人のために必死にすぎる友達（？）を切り捨てる薄情な輩へのこれは天罰かなにかか？ これは、神様の粋なはからいというわけか？

「き、金常時君……」

「……」

俺に追いついた坂本が、膝に手についてハアハアと肩で息をしながら苦しそうにあえぐ。その隙に恐る恐る彼女の様子をうかがうと。

「……！」

またもや俺は声にならない声（げええええええ！）をあげつつ、フリーズしてしまった。

なぜかは知らないが、なんと彼女は本来進むべき道を歩まずに、あろうことか俺と坂本へ続く道へと足を踏み出してきたではないか！

「……」

……いや、大丈夫だ。落ち着け。きっとこれは幻覚か何かだ。そ

うでなければ、彼女が俺と坂本の元へ歩み寄ってくるわけがないではないか？　そう自分に言い聞かせているうちに、彼女はゆっくりと俺と坂本との距離を詰めてきていた。

俺と彼女との残り推定距離　5メートル。

俺の心臓が悲鳴をあげだす。

4メートル。

全身の筋肉が勝手にひきつりだした。

3メートル。

こ、呼吸がうまくできな……。

2メートル。

ち、ちよっと、待……。

1メートル。

「……」

バシッ！

……え？

「いい加減にしてください……！」

突然頬を走る衝撃。目に涙をためて俺をにらみつける彼女。俺はなにが起きたのか理解できず、ただ、目の前にいる彼女の敵意向きだしの視線を受け止めることしかできなかった。

「あ……さ、さなちゃん？」

背後から当惑したような坂本の声が響く。が、彼女はその声に反応することなく、依然俺をにらんだままだった。

「兄さんがなにをしたって言うんですか！　これ以上兄さんにひどいことするのはやめてください！」

「ち、ちよっと待って……さなちゃん……」

まだ体力の回復しきっていない坂本が、それでも乱れた呼吸を整えながら、俺と彼女の間に割って入る。彼女は怒りに強ばった顔を俺から逸らすと、一転して心配そうな顔を坂本に向けた。

「兄さん。大丈夫？」

「う、うん。でも、違っただよ」

第19話：弟子入り志願！（その4）

「おい、坂本！　この子がお前の妹だと？　にしちゃお前らぜんっぜん似てねえじゃねえか（人のことは言えないが、とりあえず）！　　ってかお前、妹にちゃんづけって明らかにおかしいだろ！

微妙に丁寧語なのもなんか変だぞ！　それに明らかにキャラかわってんじゃねーかお前！　　さんざん師匠呼ばわりされてきた今までの俺の苦労はなんだったんだ！　　この人は金常時隼人君。僕……友達だよ　　って、なにはに candendo だよこの野郎！　　それができんなら初めからやれってんだ！

　　ってか、いきなりビンタかまされて、いきなり謝られたってどうすりゃいいんだよ！　　こちらら、気にしてないよ、ははは！

　　なんて即座に対応できるほど器用にできちゃいねえんだよ！　　無言で睨み返すことしかできねえじゃねえか、こらあ！　　ってああ……絶対、怖い人だって印象与えちゃってるよ。どうしてくれんだよお（坂本のせいではないが）！」

　　と、その場でつつこみと文句を全力でぶつけてやりたいのはやまやまだったが、好きな女の子が半径5メートル以内にいる状況で、俺にそんな真似ができるはずがなかった。というわけで、これから家の仕事の手伝い（実家が花屋らしい）をしなければならぬという彼女とはその場で別れ、成り行き上、俺は自宅に坂本を招く羽目になってしまった。

というわけで坂本を部屋に招き入れ、俺は今リビングの冷蔵庫で見つけた缶コーラを2つ手に持って、自分の部屋へ向かった。

部屋に入ると、坂本は物珍しそうに俺の部屋をきよきよと見回していた。別に見ても楽しいものなどなく、どちらかといえば気分を害する（とっちらかっているということ）風情なのだが、まああえてそこはつつこまないでおいた（おそらく、こいつも友達1人もないな）。

「ほらよ」

手に持っていた缶コーラを手渡しやると、坂本は「ありがとう」と言つて、口元に落ち着きのある薄い笑みを浮かべた。やはり、妹との接触後から坂本のキヤラは180度変わったままだった。もし、1時間前までの坂本なら「ありがとう、師匠！」なんて言つてすがりついて来るし。絶対。

「どうかした？」

まじまじと坂本の顔を見てみると、俺の視線に気付いた坂本が、そう言つて俺に目を向けた。

「い、いや、別に……」

どうやら、本人にその自覚はないらしいな。

俺は、坂本から視線を逸らして、缶コーラのフタを空けた。

「ごめんね、金常時君」

「……別に、気にしてねえよ（うそだ。ってか、好きな娘にビンタされれば誰だつてへこむ）」

俺は心にもない台詞を吐きつつ、コーラをぐっと一口飲んだ。

「きつとさなちゃん、君のこと僕をいじめる不良連中と勘違いしたんだ。余計な心配かけたくないから、さなちゃんには僕が不良連中にいびられてることは隠してるんだけど、そういうのって、どうしても隠し通せるものじゃないからね」

「なるほどな」

「え？」

「妹に余計な心配はかけたくない。それが、お前の変わりたい理由ってわけか」

「ってか、クラスの人気者になりたいとか言ってたけど、今は人格変わってるしな。」

「さなちゃんは」

「そう言っつて、坂本は虚空に目を留めた。」

「僕の本当の妹じゃないんだ」

「ってことは、お前ら血はつながってないのか」

「うん。まあ……ね」

「なるほど。それで、さなちゃんか。」

「でも、さなちゃんはこんな情けない僕にも、すごくよくしてくれる。僕のことを本当の兄みたいに思ってくれてる。」

「だから、僕にとっつて、さなちゃんは本当の家族以上に大切な存在で。」

「だから、さなちゃんに心配をかけさせたくないからかって言われれば、もちろん、そうだつて僕は答える」

「……」

「でも、それだけじゃないんだ。あの時、君が僕に投げかけてくれた言葉は、君が周りが噂するようない人じゃないつて教えてくれた。」

「僕は僕自身のために変わらなきゃいけない。それを気付かせてくれた君と一緒になら、僕は本当の意味で変われるような気がするんだ」

「坂本……」

「お前……もはや完全に別の生き物と化してるな……。でも、今の
お前となら、俺。」

「ただいまー」

「心の中で感動に浸っていたまさにその時、階下から響いてきた姉の声により、俺の感動は強制的に醒まされることとなった。」

「家の人、誰か帰つてきたみたいだね　　つて、金常時君？」

「あ、あ……？ な、なんだ？」

「いや、どうかしたの？ なんだか、顔色が悪いけど」

「い、いや……。なんでもねえよ」

「そう？」

「あ、ああ」

落ち着け。とりあえず、落ち着け。俺は自分にそう言い聞かせながら、一気にコーラをあおった。

「あー！ 私が昨日買ったコーラ！ なんてなくなってるのよ！」

そして、一気に嘔き出した。

「う、うわ！ き、金常時君？」

「ご、ごほ！ な、なんでもねえよ」

「そ……そう？ でも、もしかして、このコーラって」

「……」

「僕、まだ空けてないから返そうか？」

「……余計な気使うなよ」

「でも」

「いいって」

ありがとう、坂本。でも、もはや手遅れなんだよ。

と、そうこうしてる間に、静かな足音は確実に俺の部屋へと近づいていた。この静けさ＝春姉の怒り。つまり……そういうことだ。

トン、トン、ト……。

やがて、死神の足音は俺の部屋の前まで来るとぴたりと止んだ。まっすぐ俺の部屋へ来たということは、どうやら、死神は初めから俺を刈るつもりだったらしい。

コンコン。

あくまで、穏やかなノックの音色が、俺を優しく死の世界へ誘っていた。

「隼人？ ちょっと、いい？」

100%作りものの優しさを帯びた春姉の声。おそらく、玄関で坂本の靴を目にしているので　というわけだろう。そうじゃなきゃ、今頃ドアは蹴破られ、死神の鎌はとっくに俺の首を切り落としているはずだ。

俺は重い腰を上げて、部屋のドアを開けた。

優しく微笑んだ春姉が、部屋の外に立っていた。が、その目がまっさきに2つの缶コーラに向けられたことを俺は見逃さなかった。

「あら。もしかして、隼人のお友達？」

そう言くと、春姉はニツコリ笑って坂本に軽く頭を下げた。

「初めまして。隼人の姉の金常時春香です。よろしくね」

……そうか。坂本の前では、そのキャラでいくつもりか。まあ、初対面の人間の目の前でいきなり弟を半殺しにはできないわな……。

しかし、本性を知られている人間の目の前で、こうも堂々と上品で優しい姉を演じるとは、さすがは二重人格女。悔しいが、どこからどう見ても、非の打ち所が見あたらねえよ。

坂本も、春姉の演技に見事騙され、あんぐりと口を開けて茫然自失としてるし　って、坂本。お前、それはちよっとオーバーだろ。

「おい。どうした、坂本」

「ま、まさか……き、金常時春香？……ほ、本物？」

「？　お前、春姉のこと知ってんのか？」

「知ってるもなにも！　ピーチ姫コンテスト！」

「は？」

ピーチ姫コンテスト？　なんだそりゃ。

「ええ？　金常時君、もしかして、知らないの！」

俺の反応を見て、坂本は信じられない、と言いたげに顔を歪めると、自分の鞆から、一冊の雑誌を取り出した。

「これだよ、ほら。月刊、キャピキャピ萌え萌え娘！」

いや、自信満々に言われても知らないから。そんな雑誌知らないから。ってか、お前もしかして、それいつも鞆に入れて持ち歩いているのか？

「その30ページを開いてよ」

「あ？ ああ……」

俺は坂本に手渡された、メイド姿の女の子が表紙を飾る「月刊、キャピキャピ萌え萌え」娘」たるものの30ページを言われるがまま開いた。

「第8回ピーチ姫コンテストグランプリ発表！」

でかでかと載せられた活字が俺の目に飛び込んでくる。

これか……。

ぼりぼりと頭をかいて坂本にちらつと目を向ける。坂本は血走った目を俺に向けていた。無言のプレッシャーに、俺は続きを読むことを余儀なくされた。

「な、な、なあとおおああ今回の投票総数は過去最高の記録を3432票も上回る18643票だああああブラボーイエイフウフウオツケ」盛り上がってきたところで早速うううああ順位の発表だぜええいやつほうグランプリの栄光は誰の手にいいいやちなみにいい個人的には萌え萌えレベルメイドコスプレの左京ちゃんかああもしくはレベル猫耳ロープの春香ちゃんかああああもしくはレベルピンクレンジャーのエリちゃんかああああもしくはもういいか坂本？」

いい加減、ハイテンションな台詞をローテンションで朗読することに疲れたし。ってか、読んでて分かったのは数字だけだったな。

「じゃあ、最後のページを開いてよ」

「あ、ああ……」

少しいらつき気味の坂本に気を使いつつ、俺は急いで最後のページを開いた。そこに、衝撃的な事実が載っていることを知りもせず

「第8回ピーチ姫コンテストグランプリはああああ！！　ダントツの8295票獲得ううううああああ！！　ジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャン！！！！

エントリーナンバー42番んんんんあ！　金！　常！！

時!!! 春香ちゃんどううわあああああは〜（ソプラノ）

「第8回 以下省略 …… きん、じょう、じ、はるか……？」
… きんじょうじはるか… って、金常時春香!!」

そして、グランプリ受賞の文字の下には、でかでかと春姉の写真が掲載されていた。

……猫耳ローブ姿の。

「お、おい……？」

さすがに、この事態は想定外だったようだ。春姉はなんらかの説明を求める俺から、気まずそうに目を逸らした。

「か、か、感激です！ ぼ、僕、一目見た時からあなたの大ファンで…… サ、サインいただけませんか！」

そして、状況が分かっている男が1人……。

「ありがとう。うれしいわ」

って、開き直りやがった！

俺は2人のやりとりについていけず、ため息をついて雑誌に載っている実の姉の猫耳ローブ姿に目を落とした。

……確かに、可愛い。文句なく可愛いが…… 8295票獲得ってことは、この写真に8295人の男がまんまと騙されたってことだよな。だって、プロフィールの特技の欄に「空手ハートマーク（記号）」とは書かれているが、補足（世界3位です。変な気起こしたらぶっ殺すわよ。うふ。）はなされてないみたいだからな。

にしても、なんでまた春姉はこんな雑誌に……。

「いよつしいいいやつはあ！ 見事グランプリ獲得の金常時春香ちゃんにはああああー！ ツホウ！ 賞金30万円あげちゃうよほっほっほい！ おめでとおほ〜（ソプラノ）」

……なるほどな。ほんとに分かりやすい行動パターンしてやがる。俺は雑誌から顔を上げて、しつこくねちねちと質問を繰り返す坂本と、そのあまりのしつこさに少し引き気味の春姉に目を戻した。
「ちょっと、あんた！ いい加減こいつ何とかしなさいよ！」 的な

目を坂本の質問に苦笑いで答えながら向けてくる春姉。いい気味だぜ、とその視線に気づかない振りをしてやるのも一興だな、とは思いつながら後が怖いので俺は坂本を止めにかかった。

「へええ！ コスプレが趣味なんですか！ 実は僕も」

「おい、坂本。もういいだろ」

春姉のいい加減な返答の結果、話はわけの分からない方向へ突き進み、最終的には坂本の隠された趣味をも暴こうとしていたので、俺は慌てて坂本の言葉をさえぎった。

まあ「実は僕も」の続きがどういう類のものであるかは大方想像がつくが、一応坂本の名誉のために伏せておこう。ってか、坂本。お前、春姉の登場からまたキャラが変わったな……。

「ええ！ もう少しいいじゃない！」

坂本は情けない声を出して、俺に向き直った。

「いや……昨日から春姉少し風邪気味なんだよ。だから」

「そ、そうなの？ じゃあ、仕方ないね。風邪引いてコスプレのりが鈍っちゃ大変だもんね……」

「……」

……春姉は、こいつが俺の友達だと認識してんだよな。

「……じゃ、じゃあ、私はこれで失礼するわね」

「あ、はい！ じゃあ、また」

「え？ え、ええ……」

おそらく、二人が接触することはもう二度とないだろう。

坂本は、部屋を出て行く春姉の後姿を名残惜しそうに見つめていた。もはや、妹に心配をかけたくないだとか、俺と一緒になら本当の意味で変われるだと言ったこと完全に忘れてるな、お前……。

「いやあ、うらやましいなあ、金常時君……」

そう思うなら、変わってやろうか。とは思いつつも、こいつの夢を壊すのも気の毒（もう、二度と春姉には会えないんだよ、坂本）だったのでやめておいた。

結局、うちに来るまでの経緯を完全に忘れ去った坂本は、その後、

ピーチ姫コンテスト応募者すべての写真の良し悪しを事細かに解説した後、満足そうに帰っていった。

その五分後、俺の部屋を訪れた春姉は沈痛な面持ちで俺に言った。
「あんた……気持ち分かるけどさ……友達はもっと選んだほうがいいわよ……」

俺は何も言い返せず、半ばやけくそ気味に呟いた。

「……ほつといてくれ」

第20話：ドキドキの放課後！（その1）

「はあ……」

小鳥がさえずり、気持ちのいい陽光が降り注ぐさわやかな朝。この文句のつけようのないさわやかな朝の只中、俺の気分は奈落の底に突き落とされたがごとく、果てしなくブルーだった。

「ちよっと、隼人。早く出ないと遅刻するわよ」

気がつけば、リビングのテーブルの前に腰掛けているのは俺だけだった。親父も春姉も、とっくに朝食を取り終え、すでに家を出て行っている。しかし、俺はというと、いまだ朝食も摂らず、ひたすら一人で落ち込んでいた。その原因は、そう。昨日のあの出来事だ。坂本の妹（現在俺が片思い中のエンジェル）に、勘違いから突如としてビンタを食らわされたあの記憶が、俺の頭から離れないのだ。あえてスルーしていたが、あの後、彼女はビンタされたこっちのほうが悪く恐縮してしまうぐらい何度も申し訳なさそうに俺に頭を下げてきたのだ。それなのに、俺ときたら緊張のあまりともに彼女の目を見られもせずに、ぶっきらばうに「別に……」と返すことしかできない始末……。

ちくしょう！ そんなのぜんぜん気にしてないのに！ 「はは、この早とちりさんめー」とかなんとか言って明るく場を和ませつつ、自然な感じで彼女とお近づきになりたかったのに！ あれじゃ「ウゼえんだよ、てめえ」って言ってるようなもんじゃねえか！ そのせいで、彼女、気まずそうにさっさと帰っちまったし！

ま、まあ、すぐに帰ったのは家が花屋でその手伝いをしなければならぬかららしいが、絶対、彼女に与えた俺の印象は最悪だ……。ああ……。夢にまで見た最高の学生ライフだけでなく、初恋まで俺の手から遠のいていく……。もやは、生きてる意味さえ見失いそうだ……。

「と。やと。隼人ってば！」

「あ、あ……？ 何だよ、お袋」

「何だよじゃないでしょ、もう！ 一体今何時だと思ってるの！」

「何時って……まだ……」

そう言いつつリビングの壁にかけられた鳩時計を目にする俺。

「8時15分……って、ええ！ いつの間に！」

「馬鹿言っでないでさっさと支度しなさい！ 遅刻しちゃうでしょ！」

「あ、ああ……」

どうやら、考え事をしているうちに大幅に時間が経っていたらしい。もっとも、授業をサボりまくっている（決して本意ではなくて）俺からすれば、遅刻ぐらいどうってことはないのだが、悲しいかな、俺が学校で「死神」に祭り上げられている事実を知らないお袋に真実を語るのは忍びなかったので、とりあえず俺は急いで支度を済ませ、家を出た。

「はあ……こりゃ、完全に遅刻だな……」

この期に及んで、遅刻の一つや二つはどうってことないが、教室に俺がいないことで喜びやがるクラスメイトたちの姿がありと浮かんできて、俺はため息をついた。そして、とぼとぼと一人さびしく、いつも通っている通学路を歩く。

商店街を通り抜け、いつも彼女が通っている交差点に差し掛かったところで、俺はふと足を止めた。気のせいかな、道路を挟んだ向こう側の歩道に見知った人間を見たような気がしたのだ。

遅刻ぎりぎりのこの時間に、なぜか手持ち無沙汰に歩道の真ん中に立っている制服姿の女の子。足早に道を行くさまざまな人々があわただしい朝に追われている中、一人だけ時間に取り残されてでもいるようなその光景は俺の目を引くには十分だった。そして、目を凝らしてみたら、俺は呆気にとられ、文字通り言葉を失った。

肩辺りより少し長めに伸びたしなやかな黒髪。小柄でありながら、均整の取れた四肢はガラス細工の工芸品のような美しくも儚い印象を受ける一方、その発展途上の体つきは、少女ではなく女性として

の魅力を控えめに主張している。制服を身にまとった、清纯を絵に描いたようなその女の子は、間違いなく、俺の心を射止めた坂本早苗その人に間違いなかった。

「……！」

驚きを通り越した驚愕に、俺の意識は思わず意味もなく虚無の世界にヘッドスライディングをかました。危うくその世界の住人になりかけたところを、通りがかった散歩中のおじいさんの連れた犬にワンワン吠え立てられ、何とか目を覚ます。人間だけでなく、動物にまでも毛嫌いされる悲しき習性に救われはしたものの、やはり、神様は俺を救おうという気はまったくないらしい。

意識を取り戻した俺は、反射的に彼女に気づかれる前にこの場から逃げ出そうとしたのだ。しかし、道路を挟んだ向こう側に立っていた彼女が、犬の吠え立てる声にこちらに気づき、あるうことか彼女と目が合ってしまったではないか。そのまま、目を逸らして知らん振りをしてくれることを祈ったのだが（それもシヨックだが）、なんと、彼女は迷うことなく、横断歩道を渡り、こちらに向かって歩を進めてくるではないか！

「……！」

心臓が悲鳴を上げ、冷や汗が背中を伝う。なぜ、どうして彼女がこんな時間にここにいるのかも、俺の元へ歩み寄ってくるのかも分からない。今まで、朝、学校に向かう途中に彼女を見かけたことなんて一度もないだけに、この出会いが偶然であるとは考えにくい。もしかして、手持ち無沙汰に歩道の真ん中に立っていたのは、誰かを待っていて、その相手は他ならぬ……俺？

その考えに行き着いたとき、俺の心臓は歓喜のあまりひとりでに小躍りを始めた。おまけに、彼女が徐々に俺の元に近づいてくるプレッシャーもあいまって、小躍りからブレイクダンスにまでヒートアップした鼓動のせいで、うまく呼吸ができやしない。そうこうしている間に、心の準備もままならず彼女が横断歩道を渡りきってしまったではないか！ 早く、彼女に声をかけるための絶好の朝の挨拶

撈を考えなければっ！

「あれ？ 君って確か坂本の妹の……サナちゃんだっけ？ あ、ごめん。本名は早苗ちゃんか。おはよう。どうしたのこんな時間に？ 急がないと学校始まっちゃうよ？」

よ、よし……！（脳内思考時間3秒）完璧だ。どさくさに紛れてちやつかり「サナちゃん」なんて親しげな愛称で呼んじまえば、俺たちの距離も一気にムフフ……ってか！

そして、とうとう彼女が俺の前までやってきて足を止めた。うつむき加減に俺の前に立った彼女が、おずおずといった感じで顔を上げる。よし！ このタイミングでぶちかましてやれ！ と彼女の目をにらみ返す俺。しかし、彼女のつぶらでまつすぐな瞳と対峙した瞬間、火のついた俺の闘争本能は、頭から水をぶっかけられたがごとく、あっけなく鎮火されてしまった。

「……」

彼女を前にしながら、口を開かず仏頂面のまま彼女から目をそらす俺。やっぱ、こうなのかよ……。

「あ、あの、おはようございます」

心なし、というか明らかに沈んだ声を発する彼女。そして「……ああ」と彼女に見向きもせず小声でそっけない言葉を返す俺。声が震えて、それ以上言葉を交わせる状態ではないことはもやは言うまでもないだろう。手が震えて仕方なかったので、ポケットに両手を突っ込んで何とかそれをごまかす。しかし、そんな俺の態度に、明らかに彼女の声は曇っていった。

「あの、昨日のこと、どうしてもちゃんと謝りたくて……兄さんに聞いたら、金常時さんの家この辺だって言ってたから……迷惑だとは思ってたんですけど……」

「それで……待ってたのか……」

「はい……」

彼女の言葉に「うほほい、うほほーい！」とはしゃぐ心情とは裏腹に、緊張のあまり俺は口から息を吐き出した。そして、それを迷

惑に感じてのため息と受け取ったらしい。彼女は「ごめんなさい……」と消え入るような声を出して、そのまま黙り込んでしまった。

「いかん……！ このままでは、俺の初恋がともに相手と口を聞く前に消滅してしまう！ 今の俺の生きる希望は、もやは彼女しか残されていないのに！ と心では思いながらも、体は俺の言うことを聞いてはくれない。どうして、俺は肝心なときにいつもこうなのだろうか。そうやって、今まで大切なものを何度もなくしてきたのに、一歩もそこからは動けない。変わらない。そんな自分がどうしようもなく情けなくて、どうしようもなくやるせなかった。

やがて、気詰まりな沈黙を破ったのは彼女のほうだった。

「あの…… 本当にすいませんでした。初対面の人にあんなこととして…… 私、てつきりあなたが兄さんにひどいことしてるんだと勘違いしてて…… 兄さん、学校でいろいろひどいことされてるみたいだから…… 私には、そんなことないって言うんですけど……」

「……」

「兄さんのこと…… どうかよろしくお願いします……」

そう言い残し、彼女は俺の元から去っていった。

第21話：ドキドキの放課後！（その2）

その瞬間、明らかに場の空気が凍った。クラスメイトは一樣に俺に視線をくれた後、まるで「2秒以上目を合わすと速攻殺されます」とても言いたげに俺から目をそらす。あまつさえ、授業の解説をしながら板書をしていた女性教師まで、俺と目が合うと、手にしていたチョークをポロリと落とし、文字通り固まってしまう始末。って、ちよつと待て先生。私これから犯されますみたいなのその涙目はなんだ！　ちくしょう！　教師のあんたまで俺に怯えてたら、こいつら（クラスメイト）まで余計俺を怖がっちゃうじゃねえかよ！　などと思いながらも、もちろんクラスメイトの前で堂々と吠え立てる度胸のない俺は、無言で自分の席にかばんを置いて、悠然と教室を出て行くしかない。教室を出ると、クラスメイトたちの安堵のため息が聞こえ、俺は軽く傷つきながら屋上へ向かった。

ちくしょう……。ちよつと、遅刻してきただけなのに、何だよあのリアクションは。こっちは、気を使って後ろの入り口から、なるべく音を立てないようにそつとドアを開けたんだ。遅刻の言い訳どうしよう、なんてかわいいこと考えてた俺が馬鹿みてえじゃねえか。無言でとぼとぼと階段を上り、屋上のドアを開ける。いつもどおり、備え付けのベンチに腰を下ろして、ため息をついてから俺はその異変に気づいた。

「うお……！」

いつからか、屋上が俺のプライベートルームと化していたのでまったく警戒をしていなかった。少なくとも、今日の今日まで、俺以外の人間が屋上に足を踏み入れるなんてことはありはしなかったのだ（坂本以外）。そう、今日の今日までは。

屋上に備え付けられたベンチは、ちょうど三人がけ程度のサイズのものだ。それが二つ横に並べられてフェンスに向かい合うようにして置かれている。そして、そのベンチの一つを、見慣れない男子

生徒が仰向けに寝転がって一人で占領しているではないか。

ちょうどベンチの背に隠れて見えなかったので、腰を下ろすまで気づかなかった。いや、しかし……誰だろう、こいつ？ まさに猛獣の檻と化し、不良連中さえ近寄らなくなったこの屋上で、こうも無防備に情眠を貪っているあたり、どうやら只者でないことだけは確からしいが（自分で言っていて悲しくなるな）。

「ふんわああー……ああ……あう？」

そんな間抜けな大欠伸といっしょに、伸びをしながらベンチから起き上がる男子生徒。俺と目が合うと男子生徒は、目を丸くした後、数度目をしばたかせて、今度はきよきよと落ち着きなく周りを見回しだした。やはり、その辺の連中とは明らかにリアクションの種類が違うな、と思いつつ、俺は無言で男子生徒の様子を伺った。

ずいぶん、長いこと落ち着きなく周りをキョロキョロしていた男子生徒は、ようやく俺に目を留めると（その間約1分ぐらい）、第一声を発した。

「ねえ、俺なんでこんなとにいるんだっけ？」

「……あ？」

「あ、そっか。ここで噂の転校生を待ってたんだっけ」

そう言っつて、ポン、と手のひらにグーを当て、思いついたように声を出す男子生徒。何かよく分からないが、とにかく、絡みづらそうな奴だな……。

「で？ あんた誰？」

「……金常時……隼人……1-Bだ」

「1-B？ あ、俺も1-Bだった。でも、何で俺こんなところにいたんだっけ？」

「転校生を待ってたんだろ……」

「あ、そっか。えーと、なんて名前だっけ。確か、金閣寺……なんとか」

「もしかして、金常時隼人……じゃねえか」

「ん？ あ、そうそう、金常時なんか。もしかして君、知ってる

？」

もしかして、こいつは俺のことを馬鹿にしているのだろうか。しかし、細長の目の奥にのぞく、ぼへへとした能天気丸出しの瞳からは、悪意はまったく感じ取れない。おまけに、無造作にぼさぼさに伸ばして、手入れのまったく行き届いていない髪型も、何かこいつの人間性を物語っているようだ。男子にしては華奢な体に身に着けたカッターシャツのすそも、だらしなくズボンから中途半端にはみ出しているし、まあ、分かりやすく表すと、能天気と無頓着がいい感じにくつついて肩を組んで、というような人間だな。

とにもかくにも、本人に悪気はないようだったので、俺は親切に教えてやることにした。

「金常時隼人ってのは、俺だ」

「え？ 君が金常時なんか？」

「隼人だ」

「ふーん、君が噂の死神さん？ ずいぶん人間っぽいね」

「……」

ケンカ売ってんのか、こいつ。とは思いながらも、俺の素性を知ってもひるみもせず口を利いてくれることが密かにうれしかったので、スルーしておいてやることにした。なんか、因縁つけてきてるって雰囲気でもなさそうだしな。

「……俺に何か用か」

話題を変えるため俺がそう言うと、男子生徒はまたもや思いついたように、ポン、と手のひらにグーを当てた。

「そうそう。実は、クラスのみんなに頼まれたんだっけ」

「頼まれた？」

「うん。えーと……なんだっけ？」

「……俺が知るか」

「あ、そうそう。3年の何とかって人がなんか君に用があるらしくて、同じクラスのクラスメイトに言伝を頼んで、その言伝を俺が頼まれたんだ」

「……」

なんか、話がよく見えねえな……。

「言伝……って?」

「ん? えと……なんだっけ。忘れた」

「どこまで、なあなあなんだよ、お前……」

「うーん。なんか、女の人がどうか言ってたような……」

「お、女?」

「うん」

ま、まさか、あれか。この話の流れからすると……密かに俺に思いを寄せる3年の先輩。そして、恥ずかしくて、俺のクラスメイトに言伝を頼む彼女。しかし、クラスメイトはみんな俺を恐れ（ここだけ現実的）近づけないため、この男子生徒にその言伝を頼んだとか、そういうことか? い、いや、いや、しかし、そんな奇跡的な展開があるわけ。

「あ、そうそう。確か、放課後に体育館裏に一人で来てって言った」

あつたー……!!

「ま、ま、ま、マジか……?」

「え? うん。それ以上は思い出せないけど」

「じ、じゅ、じゅ、十分……だ……」

「そう? じゃ、せつかどうか俺ももう少し寝るけどいい?」

「お、おう……」

ま、まさか……ここに来て、こんな奇跡が起ころうとは……。

俺は、予想外の事態に、感動に打ち震えながら握りこぶしを作った。

どこのどなたかは存じないが、俺の内面をしっかりと見てくれたエンジェルがこの学校にもちゃんとしたってことじゃないか。そんなことに気づきもせず、俺って奴は心のどこかで、理想の学生ライフをすであきらめて……。

だが、しかし! こうなっただけには、俺の理想の学生ライフ再

臨だ！ 体育館裏！ 呼び出し！ 愛の告白！ 漫画やテレビで見
見たことのない憧れの展開が、今まさに俺の手の内に…… っ
てか！

いよっしゃああ！ やってやる！ こうなったら、とことん、ど
っぷりと青春の膝元で甘えまくってやるぜえ！

待ってるよ、青春！ まだ見ぬ、彼女！ 俺の学生ライフ、ここ
から本番だ！

第22話：ドキドキの放課後！（その3）

昼休み。屋上にやってきた坂本と「せっかくだから、もう少し寝る」と言つて、結局午前の授業をすべてサボリ（人のことは言えな
いが）情眠を貪った男子生徒とともに、俺はベンチに腰掛ながら昼食をとっていた。坂本からの情報で、この男子生徒の名前は渋味健しぶみけん
一、俺たちのクラスメイト（まあ、本人も1-Bと言つてたが）と判明。そして、自己紹介ついでにそのまま、なあなあな感じで昼食を一緒にとることになったというわけだ。それにしても「死神」と恐れられている俺と、いじめられっ子の坂本という、関わり合いになりたくない人間ランキングというものがあるなら確実にナンバー1、2コンビ（なくてよかった）になるであろう面子を前にしても、のほーんと「あ、じゃあ、俺も一緒に弁当食べていい？」と言つてくるとは、ある意味すごい奴だと思う。どうやら、本人はそういう世俗的なことに無関心、無頓着なだけで、つまるところ「何も考えてない」というだけのことなのだが、そういう「良さ」も世の中にはあると思う。俺や坂本のことを何も知りもしないで避けるような連中より、何も考えず俺たちと一緒に弁当を食べるこいつのほうが、よっぽど出来た人間だ。

「あ、ねえねえ、金閣寺」

しかし、こいつのこのもの覚えの悪さはどうにかならないものだろうか。同世代のやつから親しげに呼び捨てで名前を呼ばれるのは嬉しいのだが、それも京都の寺呼ばわりされて嬉しさ半減だ。別にいちいち数えてたわけじゃないけど、これで10回はこいつ俺のこ
と金閣寺と呼んでやがる。

「金閣寺じゃねえ。金常時だ」

そう言つて、にらむ（目を向けただけ）と健一は別に大して気にした風でもなく「あ、ごめん」と言つて再び俺の名前を呼んだ。

「で、金閣寺」

「お前、ごめんの意味分かってるか？」

しかし、健一はやはり別に大して気にした風もなく「うん」とうなずいた。何か、こいつを見ていたら、名前がどうかともう大したことないような気がしてきたので、もうスルーしておくことにした。でも、こいつ坂本のことは名前間違えて呼ばないんだよな。確かに、金常時つてのは珍しい苗字ではあるのだが。

「で、金閣寺さ。ちよつと質問があるんだけどいいかな」

「お、
おお。
何だよ」

同世代の人間から面と向かって質問なんてされるの初めてだな、と内心胸を躍らせながら声を出す俺。しかし、健一の質問はそんな俺の高揚感をあっさりとドブ川に突き落とすような代物だった。

「金閣寺って、犯罪歴があるってほんと？」

「えええええええ！」

健一の言葉に固まる俺。そして、健一の横で驚きの声を上げる坂本。ちなみに、爆弾発言をかました本人は、悪びれもせず目を丸くしてやがる。

「えーと、確か強盗、殺人、強姦、放火の犯罪歴を持つ少年院上がりなんでしょ？」

「ええええええええええ！き、ききき金常時君！」

⌋
⋮
⌋

ここまでやられると、もはや否定するのも億劫だ。そもそも、んなことやらかした人間を快く受け入れる高校って、どれだけ手放しな学校だよ。うちの生徒でウサ晴らしてくださいってか？　しかし、面白おかしくそんな噂を流す連中は置いて、問題はそんなことを平然と本人の前で口走る健一の奴だな。これが「そんな噂流れるけど、んなことないよね」ならいいのだが、完璧、こいつ俺の答え待ちだし。それで、健一と同じく俺の答えを息を呑んで待つてる坂本。お前、俺を見込んで弟子入りしてきたんだよな？　ここは弟子のお前が（弟子と思つてないけど）笑い飛ばして「んなことあるわけない」っていうべきだろ。もし仮に師弟関係が築かれていたら、

お前はこの時点で破門だ。

しかし、いくら待ってみても、二人は何のフォローもせずただ俺の答えを待つ始末。もしここで「イエス」と答えたら、健一は普通に「ふーん、やっぱりそうなんだ」と納得し、その横で坂本は悲鳴を上げつつこの場から逃げ出すに違いない。よくよく考えれば、俺ってやつはとことん友達運というものがないらしい。

「……んなことあるわけねえだろ」

沈黙を破って俺がそう答えると、健一は「え？　そうなの？」と聞き返してきた。他意はないのだろうから「ああ」と言葉を返す俺そして「そ、そうだよ、僕、金常時君のこと信じてるもの」と明らかに胸を撫で下ろしながら言ってる坂本にも、悪気はないのだろうが、その白々しさがかなりム力つく。さすが、いじめられっ子だな。

その後、ありもしない噂を否定し、昼食をとり終えたちょうどそのとき、坂本が何気なく「ねえ、金常時君」と俺に話しかけてきた。「なんだ？」

「今朝さ、サナちゃんに会わなかった？」

「……！」

ど、どうして坂本がそのことを！　俺はあんぐりと口をあけつつ、閉じない口を無理やり動かしながら何とか言葉を發した。

「ど、どどど、どして？」

「うん。今朝、サナちゃん僕に金常時君に謝りたいって言ってたから。一応、家の場所は教えてあげただけどちゃんと会えたか気になってさ」

そういえば、こいつ彼女の兄貴（義理の）だったんだよね……。と思いつつ、俺は返事を返した。

「お、おう……。会った……」

「そっか。よかった。一応、金常時君はそんなこといつまでも根に持つような人じゃないって言ったんだけど、サナちゃん根が真面目だから」

「そ、そか……」

妙に俺のことを知った風な口を聞く坂本だったが、彼女に好印象を与えているので別にいい。それより、問題は俺だよ俺！ 今朝、彼女にあんな態度とった拳句、放課後、知らない女からの呼び出しにウキウキ胸を躍らせたりなんかして……！ 浮かれすぎて忘れてたけど、俺にはれつきとした（？）想い人がいるというのに！

し、しかし……呼び出されている以上、無視をするわけにも……いや、しかし……いや……だああ！ 一体俺はどうすりゃいいんだよお！

そうこうしているうちに予鈴が鳴り、坂本は教室に戻っていった。そして「どうせだから、もうちょっと寝る」ともう午後の授業に出る気のない健一が、情眠をむさぼる横で、俺は一人頭を抱えた。

放課後、体育館裏に行くべきか。それとも行かざるべきか。

ああ……。俺の中の悪魔が俺の耳元で「いっちゃえよ」とささやいてくる。しかし、俺の中の天使（もちろん早苗）がそれを制止する……。

だあああ！ 一体俺はどうすりゃいいんだよおお！

タイムリミットまで、残り二時間。刻々と、選択のときは迫っていた。

第23話：ドキドキの放課後！（その4）

放課後、下校する生徒や部活動に励んでいる生徒を尻目に、俺は人っ子一人いない体育館裏に来ていた。もし、体育館裏などに一人でいるところを誰かに目撃されでもしたら、またありもしない噂を立てられることは必至だったが、それでも、やはり呼び出されている以上シカトするわけにもいかないだろう。そう。別に俺にも俺に思いを寄せる女の子に会ってみたいだとか、それをいいことに、あんなことや、こんなこと……！なんて期待をしているわけではない。俺はあくまで、こっちにその気はないにしても、相手の気持ちが無視するようなことはしたくなかったただけなのだ。だから、悪魔のささやきにそのかされたなんてことは……決してない！

それにしても、体育館裏に来てからもうずいぶん経っている。さつき、ケータイで時間を確認したら、すでに30分……。しかし、いくら待っても相手はまだ来ない。もしかすると……。いい加減、そんな考えが俺の頭をよぎっていた。

まさか、これは単なるいたずらだったとか？ しかし、健一の奴が俺をだましていたとは思えない。どう考えても、あいつはだますよりだまされるタイプの人間だ。

そう。そうだよな。第一、待ち合わせ時間とかも聞いてなかったし、もうちょつと待ってみよう！ と前向きに考えた直後、いたずらなどという考えが生ぬるく思えてしまう現実が理不尽にも俺の前に立ちはだかった。

「金常時こらあ！」

体育館裏に唐突に響き渡る怒声。そして、わらわらと人気のないそこを埋め尽くす、ごつい顔の嵐。もう衣替えの季節は終わっているのに、時代に取り遅れたがごとく、奇抜な改造を施した学ランに身を包んだ、どこからどう見ても「よからず」な人間たちが、瞬間に俺の前に壁を作り出した。その数、後ろのほうは見えないが、

およそ30はくだらない。

「……」

あまりの出来事に、俺は事態がうまく理解できず放心状態に陥った。

体育館裏。呼び出し。愛の告白。色眼鏡で俺を見ない、心優しい女の子（内気で美人）とのランデブー。美しい幻想が、またしてもガラス細工のごともろく、いともあっさりと崩れ落ちていく。そして、その崩れ落ちた美しい幻想の残骸を拾い集めて作り直された現実、ごつい顔、いかつい風貌の人間が競演して奏でる地獄の交響曲…… もとい、目を覆いたくなるほど悲惨なものだった。

「おうおうおう、金常時よお。てめえ、逃げずによく来やがったなあ、ああ？」

そして、俺の心境を完全無視して、現実は無情にも俺に因縁をつけてくる。眼前にむさいブ男の、高校生とは思えないひげ面野郎の顔が迫ってきて、俺はようやく放心の底なし沼から強制的に引き上げられた。と同時に、それが期待していたものとはあまりにもかけ離れすぎていたので、俺は吐き気を催し、思わずうつむいた。

ちくしょう。なにがどうなつてやがんだよ……。とは思いつつも、こういう理不尽な不測の事態に慣れているせいか、それほど困惑していない自分が悲しかった。

「おうおう、こら。さすがのてめえも、これだけ頭数そろえりゃイチコロってか？」

「黙ってねえで、何とか言ってみるよお！」

「いまさらびびってんのか、おう！」

「何とか言ってみるこらあ！」

眼前で何人ものごつ顔にキャンキャンほえられつつも、俺は冷静に今の状況を分析した。まあ、健一の言伝がなあなあ感じでひん曲がって俺に伝わっただけのことなのだろうが、でも、あいつ女がどうか言ってたよな……。ってか、ここにこいつらがいるってことは、俺のクラスメイトに伝言を頼んだのはこいつらだったってこ

とか。そう思いつつ顔を上げると、どいつもこいつも、以前俺に一方的に因縁をつけてきて、逆に返り討ちにした連中ばかりだった。おそらく、直接俺と対峙するのが怖くて、クラスメイトに言伝など頼んだのだろうが、それにしてもこいつらやけに強気だな。とりあえず、面倒ごとは嫌だったので俺はもう一度黙ってうつむくことにした。すると、調子に乗ったゴツヒゲ（たった今命名）が、俺の髪をつかんで無理やり俺の顔を上げさせた。その醜い顔と至近距離で目が合って、思わず眉根を寄せる俺を見て、にやりといやらしい笑みを浮かべるゴツヒゲ。しかし、ここは我慢だ、我慢。

「あれれ？ 金常時様ともあるうお方が、まさかマジで俺らなんかにびびってるわけじゃありませんよね？」

「……別に」

「あ？ なんてった？ 聞こえねーよ」

そう言ってゴツヒゲが、俺に向けておちよくるように耳に手を当たたポーズを取ると、背後の不良たちからどつと笑い声が沸きあがった。これには温厚な俺も、さすがにムカついて、俺の髪をつかむゴツヒゲの手首を驚づかんだ。すると、ゴツヒゲは驚いて俺の手を振り払うと、ひるみながら俺から距離を取った。途端に、示し合わせたように笑い声が止み、場の空気が一気にぴんと張り詰めた。

このまま黙って道を開けてくれそうにはないものの、明らかに不良連中は全員そろって引け腰だった。それを見て取った俺は、一番手っ取り早い方法でこの場を切り抜けることにした。

「……おい」

そう言って、ズボンのポケットに手をつ込み、大仰にため息をついてみせる。すると、不良たちは各々俺から一歩退いた。よし、こことどめの一発だ、と俺はゆっくりポケットから出した手を胸元まで持つてくると、バキバキと拳を鳴らして決め台詞を吐いた。

「お前ら、死にたくなかったら、黙って道あけろ」

一様に青ざめた顔から、不良たちが揃って息を呑むのが読み取れる。そして、そこで道は開かれ、何のいさかいも起さずこの場を切

り抜けられるはずだったのだが、ここで予想外の事態が起こった。黙り込み、今まさに開かれようとした不良たちの壁の背後から無遠慮に「あーもう！」となぞの声が割り込んできたのだ。

その声が聞こえた瞬間、俺はそれが空耳であることを心から祈った。そして、その次には、その声に聞き覚えがあることを全力で否定し、いやな予感を無理やり押しつぶした。しかし……。

「いつまで待たせんのよ！ こっちはわざわざ時間割いてきてやってんだから、さっさと済ませなさいよ！」

「あ、あねさん。一応こっちにも立場つてものがありますので話が済むまでもう少し待」

「お前らの立場なんか知るか！」

その傍若無人な台詞とともに「ぎゃう！」と不良の一人の悲鳴がとどろき、同時に背後のほうから不良の壁が左右に別れ、一直線に道が開かれた。そして、開いた道の先に立っていたのは、ごつい男たちの寄せ集めの中、あまりにもこの場には浮いている、セーラー服に身を包んだ女の子だった。

それが、ただの女の子であつたなら、迷子の子猫ちゃんのようなだと形容しても差し支えないのだろう。しかし、そいつを見た瞬間、無理やり押しつぶしたいやな予感が俺の中で吹き上がり、俺の意識は混乱の渦の中へ一気に放り込まれた。ちなみに、その女の子の足元には、不良の一人が悶絶しながらぴくぴくと痙攣を起こし、地べたにはいつくばっていた。

「な、な、な、な……」

長身に細身の体。それでいて、豊かな胸と引き締まった腰がかたどる悩ましい曲線美は見事に身に着けたセーラー服の魅力を引き出し、同時に本人の美貌も引き立てている。勝気な性格を現したきゅっと鋭い瞳は、苛立たしげな光を宿していたが、表情を和らげれば、たちどころに、その傍若性は影を潜め、世の男どもはみんなその二面性にだまされる。そう。そこには、傍若無人という言葉が知りたければ、この女を観察すればいい、と思わず言いたくなる、俺のよ

く知った女が立っていた。

「な……なんで春姉がここにいるんだよぉ！」

俺の台詞に「えええ！」と不良たちが驚きの声を上げる。まあ、無理もない。しかし、当の春姉は別に驚きも困惑もせずあっけらかんと「あんたこそ、何でこんなところにいんのよ」と返してきた。

「な、何でって、ここ俺が通ってる高校だろが！」

「え？ あ、そういえば、そうだった」

「……てめえの弟が通ってる学校ぐらい覚えとけ」

「なに？ なんか言った？」

「べ、別に……そ、それよりこんなとこでなにしてんだよ！」

「なにつて、なんかこいつらが、やたらケンカが強い転校生がいて自分たちじゃどうにもできないからって助っ人頼まれてさ。ま、私はんなこと興味ないんだけど、助っ人代が破格だったもんでね」

「……」

やたら強い転校生。助っ人。そして、この状況……。ま、まさか、これって。

「で？ そのやたらケンカの強い転校生ってのはどいつよ」

そう言つて、春姉は周りの不良に目配せした。すると、不良たちはいつせいに無言で俺を指差した。

「え？」と間の抜けた声を漏らしてから、俺と目をあわす春姉。

「あ、あははは……」

どうやら、人間気まずい状況ではどうにも笑うしかないらしい。信じられない事態に追い込まれ固まる俺を尻目に、春姉は苦笑いした。なぜか、不良たちも春姉と一緒に苦笑いをしている。なんか、無茶苦茶空気重てえ……。

「コホン！ あー、その……なんといいますか……」

「……」

言葉を濁す春姉を、息を吞んで見守る俺と不良たち。今まさに、俺の命運は目の前の傍若無人な女に握られていた。まるで、生きた心地がしねえ……。と、思っていると、春姉が重い口を開いた。

「い……」

「……？」

「い……いざ！ 尋常に勝負！」

開き直りやがった、こいつ！

「いや、ちよつと、待てえ！」

「待てないの！ 今月の新作バッグは待つちゃくれないの！」

「てめえには血も涙もねえのか！」

「ふ……もやは問答は埒もなし……言いたいことはその拳で語りなさい、我が弟よ……」

そう言つて、左半身を斜め後ろにずらし、拳を構える春姉。その構えを見ただけで、過去のトラウマがよみがえり、俺は吐き気を催した。不良30人ほどを前にしてもまったく危機感を覚えなかった俺の体が、急速に身の危険のアラームを鳴らした。

ちくしょう。こいつに、血と涙を求めた俺が馬鹿だった……。こうなれば、もはや残された道はひとつしかない。

「そつちがその気なら……」

体中からいやな汗が噴出す。緊張で呼吸がうまく出来ない。

そして、命がけの姉弟ゲンカの開始の合図のように、けたたましいチャイムの音が校内にこだました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5078a/>

虹色の明日へ

2010年10月28日07時01分発行